

Hokkaido University News

北大時報

令和4年

1

No. 814 January 2022

「2040年に向けた北海道大学の国際戦略」を策定
樋渡雅人准教授がウズベキスタン大統領より「ウズベキスタン独立30周年記念」勲章を受章
長縄宣博教授が日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を受賞



全学ニュース

- 1 総長年頭挨拶
- 3 「2040年に向けた北海道大学の国際戦略」を策定
- 4 樋渡雅人准教授がウズベキスタン大統領より「ウズベキスタン独立30周年記念」勲章を受章
- 5 長縄宣博教授が日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を受賞
- 6 第8回 定例記者会見を開催
- 7 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 札幌市立啓明中学校及び札幌国際情報高校へ向けて2名の研究者が講義を実施
- 8 北大フロンティア基金
- 11 令和3年度北海道大学DX博士人材フェローシップに467名を採択、授与式・ガイダンスを開催
- 12 新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施
- 13 令和3年度第2回新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催
- 13 コロナ禍で困窮する学生への学生支援（第2回目）を実施
- 14 令和3年度北海道留学生交流推進協議会総会をオンラインにて開催
- 15 総長と高等学校等との懇談会をオンラインで開催
- 16 2021年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rd Batch ファイナルデモンストレーションを開催
- 17 アフリカルサカオフィスでの現地活動再開
- 17 「日本留学海外拠点連携推進事業（ロシア・CIS）」による業界研究セミナーを開催
- 18 「第5回北海道大学フィンランドデー フィンランドの美しい冬景色を想って」を開催
- 19 寶金総長が「一帯一路」大学連盟オンライン会議に出席
- 19 大連理工大学－北海道大学 協定締結10周年記念式典・大学交流デーを開催
- 20 令和3年度第1回サステナビリティ推進員会議を開催
- 21 博士人材と企業の情報交換会 第47回「赤い糸会」を対面で開催
- 22 外国人博士人材と企業の情報交換会 CAREER LINK MEETUP 2021（英語版赤い糸ONLINE）を開催
- 23 北海道大学・東北大学・名古屋大学合同シンポジウムを開催～連携型博士研究人材総合育成システムシンポジウム2021～
- 24 中学生対象 体験型理科実験教室 『「感じて」動くロボットを作るには』開催



総長と高等学校等との懇談会をオンラインで開催



2021年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rd Batch ファイナルデモンストレーション開催



令和3年度北海道大学DX博士人材フェローシップに467名を採択、授与式・ガイダンスを開催



コロナ禍で困窮する学生への学生支援（第2回目）を実施

部局ニュース

- 25 令和3年度理学院優秀研究奨励賞授与式を挙行
- 25 総合博物館来館者200万人達成！
- 26 工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催
- 26 令和3年度第1回農学研究院FD研修会を開催
- 27 国際広報メディア・観光学院の大学院生がSDGsをテーマに取材・制作した動画が北海道放送で放映
- 28 低温科学研究所技術部で第27回技術報告会を開催
- 28 附属図書館（北図書館）において学部選択関連の図書展示を実施
- 29 附属図書館で Mendeley オンライン講習会を開催
- 30 和歌山研究林でアートプロジェクト「森のちからXII」を開催
- 31 スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際ワークショップ「権威主義的統治の制度と戦略」開催
- 32 「脳科学研究教育センターオンライン研究発表会」の開催

博士学位記授与 33

諸会議の開催状況 36

学内規定 37

研修

- 39 令和3年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

表敬訪問 40

人事 41

- 41 新任教授紹介
- 43 新任部課長等紹介

計報

- 44 名誉教授 若濱 五郎 氏



博士人材と企業の情報交換会 第47回「赤い糸会」を対面で開催



中学生対象 体験型理科実験教室 『「感じて」動くロボットを作るには』開催

表紙：総長年頭挨拶（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景② クラーク像（北9条西7丁目）

年頭のご挨拶 ---新しい基幹総合研究大学を目指して---

第20代総長 ほうきん きよひろ
寶金 清博



令和4年の新年を迎えました。明けましておめでとうございます。北海道大学教職員、学生、関係者の皆様におかれましては、穏やかで静かな新年をお迎えのことと思います。

お正月にキャンパスを歩いてみました。雪に覆われた中央ローンや古河記念講堂周辺の空気は、低い冬の日差しの中で、時々キラキラと輝き、凜とした北国の厳冬期を実感させます。すでに、いろいろな場でお耳に入れている「光」は「北」から「北」から「世界」へというスローガンは、こうした厳冬期の雪と氷に覆われた北大の風景を強く意識したものです。

緑に包まれ、ポプラ並木に縁どられた初夏の北大農場、銀杏並木が黄金色に輝く晩秋の北大の風景も素晴らしいのですが、「光は北から」のイメージとなったこの氷点下の北大の風景は、私たち、北海道大学に関わるものにとって、特別なものです。

地球温暖化とはいえ、北海道の冬は深い雪に覆われ、氷点下の毎日が続き、道は凍てつきます。通学、通勤が妨げられるような吹雪の朝もあります。それが、自然のあるべき姿であり、札幌農学校開学以来、私たちに与えられた初期条件であり風土です。東京や日本の温暖地域と較べると、この自然は、過酷であり、将来にわたっても、変わらない前提だと思います。

「光」は「北」から「北」から「世界」へのスローガンは、そうした天与の厳しい教育・研究環境の中でこそ、全人教育、基礎科学、応用研究、フィールド研究が発展し、北海道大学の環境でなければ達成できない高い理想があることを示しています。

歴代総長の年頭の挨拶を振り返ると、どの総長も、その一年は、大きな変革・節目の一年と記述されているように思います。それほどに、大学は改革の波に追われ、特にこの数年間、大学改革のスピードが加速していることは事実です。

私もまた同じことを述べることになりますが、今年から始まる国立大学法人の第4期中期目標期間は、さらに大きな大学改革のスタートとなる点で、特別な一年と考えま

す。言い換えると、「いつもの大学改革」とは、次元の異なるステージに入ると考えています。

大学は、近代史を見ても、基本的にその形態を大きく変えることなく、その規模において発展し続けてきた稀有な組織の一つです。直近の50年ほどを見ても、極めて安定的に拡大してきた事業体という点においても、異例な組織です。日本においても、大学の数も入学者数も明治の黎明期以来、増加の一途をたどってきました。その基盤には、若年人口の一貫した増加、明治以来、国が奨めてきた科学技術立国の考えが基盤にあることは言うまでもないことです。

これに対して社会は、大きな戦争、経済構造の激変、社会構造の根本的な変化の影響を受け、この数十年を振り返っても、大きな変化を遂げてきました。そうした社会の変化の中で、平成以降の30年を振り返ると、急速に進行した少子化と我が国の経済産業力の相対的低下による大学への財政支援の低下は、「変わらない大学」を揺さぶり続けています。昨年の年頭挨拶でも、大学が孤高の象牙の塔として存在し続けられる「甘い夢」の時間がとうに終わっていると述べていますが、独立行政法人化以降、次々と大学改革がトップダウンで国立大学法人に示されました。

その中心となる考えは、大学が、科学・技術力の革新的強化によって社会イノベーションをリードすべきであること。そして、我が国が世界の先頭集団に再び追いつくための重要なエンジンが、研究力の高い「国立大学法人」であるということです。研究力強化が様々に政策化され、実行に移されています。

年頭の挨拶に、国全体で進んでいる大学改革の詳細な説明は馴染まないと思います。ただ、世界レベルの「研究力」フィールドでの競争という観点から、必然的に大学の階層化が一層進みました。加えて、教育においても少子化の中で、歴史ある総合大学さえも選ばれる側になることは間違いありません。その中で、北海道大学は、世界的な研究を進めると同時に、地域創生や地域貢献を力強くけん引する地域の総合研究大学のロールモデルを目指します。そのためには、それに相応しい研究・連携体制が必要です。官製の大学改革にキャッチアップすることばかりでなく、自ら、自律的な大学改革を進めていく必要があります。大

学のオートノミー（自律）はそのために必須の要素です。オートノミーの前提は、構成員全員が厳しい情報も含めて共有し、自らが考え、行動することです。この点は、皆様にも重ねてご協力をお願い申し上げます。

第4期に向けて、私たちは、中期目標・中期計画を分かりやすい6つのビジョンとして提示しています。すでに、昨年中にいくつかの部局の皆様にはご紹介しましたし、今後、多くの部局の方々にご紹介する予定です。さらに、ホームページや様々なメディア媒体を通じて、学生や北海道大学をご支援いただいているステークホルダーの皆様にも分かりやすく説明したいと考えていますので、ご覧下さい。

その本質は、例えば、昨年の年頭挨拶などでも常に主張しているように、「社会との連携」です。大学の機能は、「教育」と「研究」の二つの両輪ですが、国立大学法人化後は、「社会との連携」が加わりました。その上で、世界の課題、すなわち、SDGs達成に貢献する大学を目指すことを第4期の中期目標・中期計画に掲げる予定です。

「社会との連携」は、大学にとっては、「教育」「研究」に付加する二次的なものという誤解がありますが、そうではなく、「教育」「研究」「社会連携」という三つのミッションがあると考えする必要があります。このためには、組織整備、人員措置、予算措置が必要であり、その準備を進めています。さらに昨年、SDGs実現に貢献するために、新しい組織を立ち上げております。この他にも、大学院改革、DXなどによる働き方改革、データ駆動型大学など、

多くの新しいプランが実行に移されます。

北海道大学は、「比類なき大学」を目指しています。これは、この北の地で、厳しい冬の季節を経験し、乗り越えて、培ってきた独自の教育・研究の歴史と風土が本学には根付いており、それらは「勝ち負け」では測れないものという意味を含めています。しかし、「比類なき大学」として孤高であることと、国内外の大学間の厳しい競争的環境の中での成長の両立は、実際には容易ではありません。

ウィニング・カルチャーと言う言葉を、いろいろな場で皆様に伝えております。これは、言わば「勝ち癖」です。言い換えると、「成功体験」を積み重ねることで組織が成長することを意味します。スポーツの世界では、しばしば、このウィニング・カルチャーがチームに根付くことで、好循環が生まれ、強いチームが育ちます。その基本は、自分達らしさ、組織が本来持っている強さを明確にして、それを磨きあげることだと思います。

令和4年、北海道大学は、本来の強みを磨きあげ、弱点を克服し、成功体験を積み重ね、大きく成長する一年になることを目指します。

コロナ禍の終息が全く不透明な新年を迎えましたが、今年がポスト・コロナの元年になると確信しております。最後になりますが、このコロナ禍の中、皆様、ご家族の今年一年のご健勝を祈念して、年頭の挨拶とさせていただきます。

「2040年に向けた北海道大学の国際戦略」を策定

12月20日（月）、近年の国内外の主要大学との競争激化や新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大等を踏まえ、本学の新たな国際化に向けた方向性を定めた「2040年に向けた北海道大学の国際戦略」を策定しました。

本国際戦略は、寶金清博総長が就任時に示した『総長方針「比類なき大学」を目指して第4期中期目標期間に向けて』において、教育・研究・社会連携における長期的視点に立った国際戦略の策定の必要性が示されたことを受け、寶金総長の強いリーダーシップの下、各部局への意見照会及び意見交換、経営協議会及びステークホルダー懇話会による外部有識者からの意見を反映し策定しました。本学の国際化を推進してきた「近未来戦略150」の中核となる

大学改革プランである「Hokkaido ユニバーサルキャンパス・イニシアチブ」（以後「HUCI」という）が築いた成果を踏まえて、2040年までの中長期的な将来に向かって国際の観点から本学が歩むべき方向性を示しています。

本国際戦略では、冒頭に2040年に向けて本学のあるべき姿として3つの将来像を設定し、これを実現するため、「頭脳循環する大学」「流動し課題解決に貢献する学生・教員」「サステイナビリティの追求」「進化するマネジメント」の4つの柱から戦略目標が立てられ、その実現のための具体的な取組を策定しています。

また、それに先立ち、ポストHUCIにおける本学の国際化推進の在り方を再定義し、2つの方向性を明確にして

います。第一の方向性を、HUCIの成果を持続可能な形へ見直すための「量的拡大」の路線から教育研究の「質重視」への移行としました。第二の方向性は、新型コロナウイルス感染症拡大を契機に世界で格段に広がったオンラインによる教育や国際交流の取組の拡充です。

本国際戦略は、HUCIと同様に、教育、研究、社会連携を含む総合的な内容となっており、今後、広く本学関係者が参照すべき指針として活用され、世界の課題解決に貢献する本学の発展に長期的に活かされることが期待されます。

（国際部国際企画課）

国際戦略 骨子

【2040年に目指すべき北海道大学の姿】

- I. 多様な国・地域・組織の人々と連携・協働して世界の課題解決に貢献し、豊かな未来社会をつくる原動力となっていること
- II. 本学の設置の経緯や独自の発展の歴史、地誌的特性に基づく多様な分野でのグローバルな教育・研究を通じて、独自性や優位性をもってサステイナビリティの実現に貢献し、比類なき大学として世界的に認知されていること
- III. 多様な学生・研究者・教職員が活躍する公平かつ包摂的なキャンパスの国際化を実現していること

HUCI構想の成果を活かし「量的拡大」から
教育研究の「質重視」への転換



教育デジタル化を
見据えた国際戦略の推進

柱となる4つの戦略目標

1. 頭脳循環する大学	2. 流動し課題解決に 貢献する学生・教員	3. サステイナビリティの 追求	4. 進化する マネジメント
知の好循環による人材育成の 推進と研究力の向上	魅力的な国際協働共修 環境の推進	サステイナビリティ関連 分野での実践的な貢献	国際対応力を推進する ための環境・体制整備
●優秀な留学生の正規課程への受入れを促進する学位プログラム等の整備 ●博士等の学位を取得した修了生が大学等に職を得て後進を育成し、次世代の学生が本学に留学する知の好循環の推進 ●留学生の日本定着化を目指し、日本語教育を拡充するとともに就職・キャリア支援を促進 ●海外学位・資格の適正な審査・評価の推進、安全保障貿易管理の徹底 ●外国人研究者・留学生の生活支援等、受入れ支援体制整備 ●外国人研究者・留学生の宿舎充実 ●多様な学生・研究者の交流機会・空間の拡充	●効果的・体系的な留学プログラムの構築 ●オンラインによる教育プログラムを積極的に創出し、渡航せずとも学生が国際共修機会を持てる環境を整備するとともに効果的なハイブリッド型の留学プログラムを構築 ●授業や研究室の国際共修機会を拡充し、異文化理解力・コミュニケーション力等を強化 ●戦略的に重要な協定校との質保証を伴った連携・交流・枠組み作りの推進 ●海外派遣時における危機管理体制の強化 ●教員の国際経験の機会創出	●強みを持つ分野の基礎研究力の向上 ●自然豊かなキャンパスを活用した実学研究・応用研究の推進 ●国際的先端協働研究拠点等の活用、異分野融合的な共同研究や産学連携の推進 ●サステイナビリティ関連分野の体系的なカリキュラム開発 ●フィールド資源・研究施設を活用した国際協働教育の推進 ●国際機関・政府機関・自治体・企業等との連携強化 ●サステイナビリティ関連教育研究分野の取組を効果的に発信し、国際プレゼンスを向上	●重点地域・国別戦略に基づく国際展開 ●協定校との戦略的な連携推進 ●国際交流状況の分析機能の強化と効果的な活用 ●学内各部署の国際活動に関する連携強化 ●国際業務を専門的に対応できる職員の拡充及びその効果的な配置 ●海外オフィスの戦略的な活用 ●戦略的な国際広報活動の推進

中期目標・中期計画等に適宜反映

2040年に向けた北海道大学の国際戦略骨子

樋渡雅人准教授がウズベキスタン大統領より 「ウズベキスタン独立30周年記念」勲章を受章

12月5日、駐日ウズベキスタン大使館にてウズベキスタン共和国独立30周年を記念する叙勲式と憲法記念日を祝う式典が行われ、経済学研究院の樋渡雅人准教授が「ウズベキスタン独立30周年記念」勲章を授与されました。

この勲章は、ウズベキスタンと日本の交流の発展に貢献をした日本人に対して贈られるもので、樋渡准教授はウズベキスタンの地域社会や経済・開発に関する研究活動の他、大学間交流や

留学生の受け入れ、その他様々な政府イベントや会議への参加などが評価されました。

式典では樋渡准教授の他に、多々見良三氏（舞鶴市市長）、永田恭介氏（筑波大学学長、国立大学協会会長）、佐分晴夫氏（名古屋経済大学学長）、福川伸次氏（東洋大学総長）、矢口悦子氏（東洋大学学長）、川端良子氏（東京農工大学准教授、日本ウズベキスタン協会理事長）が、ムクシンクジャ・

アブドゥラフモノフ大使から勲章を授与されました。

樋渡准教授は「ウズベキスタンでは、ここ数年、新大統領の下で、政治・社会・経済・外交・教育などあらゆる分野で目覚ましい改革が進展しています。同国のダイナミックな発展が持続されるよう、今後とも応援していきたいと思っています。」と述べました。

（経済学研究院・経済学院・経済学部）



ムクシンクジャ・アブドゥラフモノフ大使から授与



樋渡准教授



勲章

長縄宣博教授が日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を受賞

スラブ・ユーラシア研究センターの長縄宣博教授が、「ロシアとイスラーム世界の絡まり合いについての総合的研究」というテーマで、第18回（令和3年度）日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞を同時受賞することが発表されました。

長縄教授は、これまでの研究成果をまとめた『イスラームのロシア帝国・宗教・公共圏 1905-1917』（名古屋大学出版会）の出版により、第8回三島海雲学術賞（2019年度）、本学の教育研究総長表彰（2020年度）を受賞されていましたが、このたび若手研究者にとって最も栄えある日本学術振興会賞と日本学士院学術奨励賞の受賞により、その成果が国際的にも一級品のものであることが証明されました。

日本学術振興会賞の受賞は、本学と

しては12人目の狭き門ですが、人文社会系の本センターでは3人目の受賞となり、受賞理由は以下の通りです。

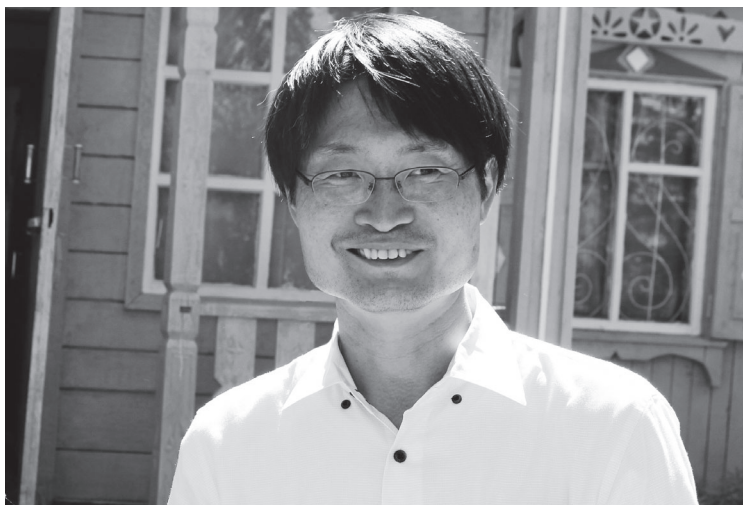
「長縄氏の研究は、20世紀前半、ロシア帝国論とムスリム社会論が交差する、ヴォルガ・ウラル地域の、タタール民族社会に焦点をあて、ロシア語、タタール語など多言語史料を駆使し、とくにロシア帝国内におけるムスリム・コミュニティの宗教と、現実的な共同体秩序の両面から考察している。このような着眼点は世界的に極めて独創的であり、長縄氏の『ロシアのなかのムスリム』論はすでに世界の学界で認知され、・・・今後ロシア史研究の分野において世界を牽引する研究者として更なる発展が期待できる」。

また、日本学士院学術奨励賞は、日本学術振興会賞受賞者25名のうち、今

後の活躍が特に期待される6名に授与されることが決定しました。

長縄教授は、2021年10月から東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とのクロスアポイントメントをもとに、中東学、イスラーム学と本センターのスラブ・ユーラシア学を接合する新しいプロジェクトを立ち上げようとされています。この研究プラットフォーム「生存戦略研究」は、地域を超え、人文系の諸学問を総合するものであり、部局を超えた本学教員の参画も予定されています。本センターは本学の人文社会研究の発展に向けて、今後とも尽力していきます。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



長縄教授

第8回 定例記者会見を開催

12月16日（木）、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けてわかりやすく発信することを目的とした「定例記者会見」を開催しました。吉見 宏理事・副学長（広報室

長）の進行のもと、化学反応創成研究拠点（ICReDD）の前田 理拠点長及び鈴木章賞組織委員会の澤村正也委員長が発表し、北海道教育庁記者クラブ加盟社等から6名の参加がありまし

た。発表内容は以下の通りです。

（総務企画部広報課）

発表事項（発表者）

- ・化学反応開発における顕著な功績を表彰する「鈴木章賞」の創設について

ICReDD拠点長 前田 理 （理学研究院）

鈴木章賞組織委員会委員長 澤村正也 （理学研究院）



定例記者会見の様子



発表を行う澤村委員長



記者からの追加取材に答える前田拠点長



当日の発表者と吉見理事・副学長
（左から澤村委員長、吉見理事・副学長、前田拠点長）

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 札幌市立啓明中学校及び札幌国際情報高校へ向けて2名の研究者が講義を実施

11月10日（水）に札幌市立啓明中学校，11月17日（水）北海道札幌国際情報高等学校に向けて，計2名の研究者が講義を実施しました。

職業調べ・インタビュー活動 ～大学教員とは～ 先端生命科学研究院 教授 比能 洋

中学1年生を対象に大学教員という職業を紹介しました。講義前半では、本学の概要や研究者の役割，そして比能教授の研究テーマである，様々な生命現象で重要な役割を果たす糖鎖について解説しました。後半はインタビュー形式で実施され，10名以上の生徒からの質問に一つひとつ丁寧に回答していました。



生徒からの質問に答える比能教授

日 時：2021年11月10日（水）13：45－14：45
会 場：札幌市立啓明中学校（オンラインにて実施）
参加生徒：1年生 26名

有機化合物の常識を打ち破る！～究極的結合への挑戦～ 理学研究院 准教授 石垣侑祐

有機化学の概論を述べた後，2018年に論文を発表した，世界一長い「炭素－炭素単結合」創出までの道のりや意気込みを話しました。生徒からは，「今まで無関心だった化学に興味が湧きました」といった感想がありました。



自身の研究について説明する石垣准教授

日 時：2021年11月17日（水）13：20－15：05（45分講義×2）
会 場：北海道札幌国際情報高等学校
参加生徒：2年生 35名

アカデミックファンタジスタとは？

本学の第一線の研究者が，出張講義やオンライン講義などを通じて高校生に研究を伝える「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。

今年度はコロナ対策を十分に行って，札幌近郊の高校等を対象に17名の教員が講義を実施しています。

当事業は，内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として，北海道新聞社の協力のもと，平成24年度より実施しています。

研究広報特設サイト「リサーチタイムズ」やFacebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご

覧ください。

リサーチタイムズ

<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/>

Facebook @Hokkaido.univ.taiwa

（総務企画部広報課）

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をするとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報

基金累計額（11月30日現在）

31,753件 5,682,660,212円

11月のご寄附状況

法人等15社、個人271名の方々から30,685,483円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

医療法人財団 幸悺会 石狩幸悺会病院、伊藤組土建株式会社、医療法人社団 熊澤歯科、一般財団法人札幌陸上競技協会、渋江医院、シミックヘルスケア・インスティテュート株式会社、医療法人 千隆会、たかはし内科消化器内科、大高酵素株式会社、電制コムテック株式会社、北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会、株式会社ホクドール、医療法人社団 ゆきざさ循環器内科、医療法人社団敬愛会 わかばやし内科クリニック

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青木 俊介	青木 宏	朝井 克司	渥海 航	安彦 和之	阿部 雅史	荒谷 義和
飯田 良親	井口 光雄	石井千枝子	石井 哲夫	石井 寛	石原 裕太	犬童いづみ	井上 勝一
猪股 路子	井原 博	入澤 秀次	岩崎 公彦	内山 喬一	江川 栄一	蛸澤 一	縁記 和也
遠藤 公憲	大城 純市	太田 正敏	大谷 由博	大橋 人司	大原 正範	大室 広行	岡田 智雄
奥田 英信	小田原一史	小原 秀雄	加川 尚	蠣崎 広信	柏川 一男	柏川もと子	梶原 弘
金川 眞行	兼平 孝	河本 充司	衣川 暢子	木下 久代	木村 清延	権 錫永	久保 周吾
熊谷 敬太	熊谷真由美	倉田 博司	栗本 綾子	小林 賢人	小林 泰	小松 寿幸	近藤 千鶴
近藤 俊江	齋藤 憲一	齊藤 晋	齋藤 卓哉	齋藤 久	齋藤 睦	坂本 大介	坂本 靖之
桜田 通雄	笹井 秀敏	佐々木博康	笹山 哲朗	佐藤 弘次	佐藤 栄治	佐藤 紘一	佐藤 哲也
佐野 公昭	澤村 昌樹	三升畑元基	三分一博基	志済 聡子	品川 陽子	篠田 好彦	芝田 正
島倉 良成	首藤 義明	白尾 誠二	白鳥 貴久	菅野 和明	菅原 新也	菅原 園枝	杉江 和男
須甲 憲明	鈴木 貴之	瀬名波栄潤	瀬沼 宏章	善端 盛一	園田 保男	高木 美里	高田 弘
高橋 歩	高橋 亘	高安 皓一	田口 浩之	竹田 剛	橘 孝則	巽 聡子	田中 和裕
田中 俊之	田中 充哉	種田 忠夫	玉木 長良	丹治 道彦	土屋 和子	土家 琢磨	土屋 裕
鶴田 敏郎	寺澤 睦	照屋 均	天満 太郎	戸田 純子	富所 祐介	豊田 威信	内藤 亨
永井 達夫	永井 典久	中島 進一	中塚 英俊	中野 平	中町 昭道	中村 雅夫	新美 大伸
西田 実弘	西村 正治	沼倉 修	橋爪 幸子	花田 秀一	花田 司	浜谷 一郎	平瀬 隆弘
平山 知子	深尾 浩	福居 嘉信	福士 幸治	福田 直也	福田 文治	福永 悟郎	福原 啓之
藤川 眞治	藤澤 裕子	細川 悌弘	細川 吉博	本間 昭一	前田 博	前田 誠	政氏 伸夫
町田 貴裕	松岡 優奈	松田 健一	松原 謙一	松本 真介	三谷真由美	宮田 信幸	村上 泰一
村上 幸夫	村瀬徳啓充	矢嶋 剛	柳原 哲郎	柳谷 憲治	山岸 義和	山下 裕久	山田 滋

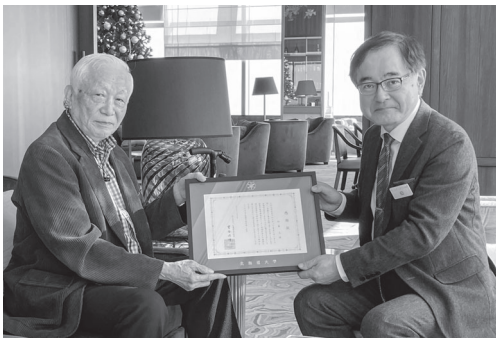
山田 友花	山本登志美	山本 真	山本 睦	山本 芳輝	湯泉 隆一	横山 考	横山 英明
吉井 清信	吉井 誠	吉田 敏男	吉田 広志	吉田 学	吉村 直孝	米田 功	米田 穰
Lee Abby	脇坂 明美	和久津和洋	渡辺明日香	渡邊 拓巳	渡辺 康了	渡部悠里子	

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（個人）

岩崎 公彦, 澤村 昌樹, 内藤 亨, 中村 雅夫, 福原 啓之, 細川 吉博, 柳原 哲郎, 柳谷 憲治, 山田 滋, 脇坂 明美

感謝状の贈呈



加藤 元 様（令和3年11月18日）



株式会社日立製作所 様（令和3年11月19日）



土屋 努 様（令和3年12月1日）



大地みらい信用金庫 様（令和3年12月6日）



株式会社北洋銀行 様（令和3年12月7日）



石山 喬 様（令和3年12月21日）



栄研化学株式会社 様（令和3年12月22日）



土屋 裕 様（令和3年12月22日）



株式会社くいと 様（令和3年12月23日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

（<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>）の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

令和3年度北海道大学DX博士人材フェローシップに 467名を採択、授与式・ガイダンスを開催

12月21日（火）、令和3年度北海道大学DX博士人材フェローシップ授与式・ガイダンスを開催しました。

北海道大学DX博士人材フェローシップ制度は、本学が国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に「Society5.0を牽引するDX博士人材育成のための研究支援プロジェクト」として採択されたことを受け、創設しました。選抜された優秀な博士課程学生に対し、生活費相当額及び研究費を支給し、さらにキャリア開発・育成コンテンツの提供を行うなど、博士課程の学生が研究に専念できる環境を提供し、研究力の向上を図る支援を行うものです。

事業初年度である今年度は、9月～

10月にかけて募集を行い、募集定員を上回る多数の学生から応募があり、審査・選抜の結果、467名の採択を決定しました。初年度採択学生に向けた今回の授与式はオンラインで開催し、寶金清博総長、山口淳二理事・副学長からの激励のメッセージに加え、採択生に後日贈られる認定証としての「オープンバッジ」について概要を発表しました。さらに、採択された学生を代表し、博士課程の学生2名から、今後の研究活動に関する意気込みや抱負が発表されました。

ガイダンスでは石森浩一郎事業統括・理学研究院教授や関係委員会の委員長から予定されているプログラムの説明があり、支給される研究費や研究奨励費についての使用方法など、博士

課程の学生が研究者として主体的に研究を進めるための手続について解説を行いました。

当日のオンライン配信・オンデマンド配信は日本語で行い、後日、英語の字幕をつけた配信を用意することで、留学生のニーズにも対応しています。

令和4年度の募集や今後のイベント情報については、随時、以下のポータルサイト等でお知らせしています。

ポータルサイト

<https://sites.google.com/eis.hokudai.ac.jp/dxphd-fellow/home>

（学務部学務企画課）

日時：2021年12月21日（火）11：00～12：00

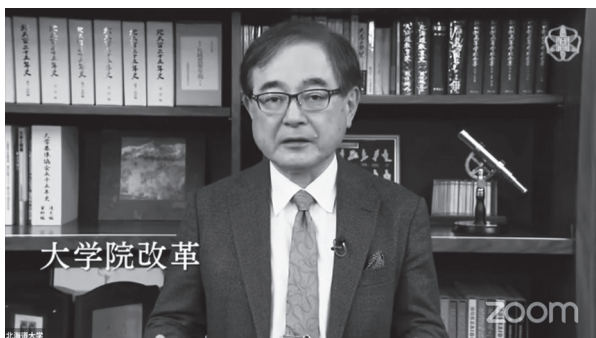
会場：オンライン配信及びオンデマンド配信※

出席者：寶金清博総長、山口淳二理事・副学長、石森浩一郎事業統括、藤田 修教務委員会委員長、吉原拓也キャリア委員会委員長、青木文男会計担当係長

代表学生：戸野塚周平（教育学院）、梶原ナビール（医学院）

撮影協力：株式会社テレビ北海道（映像）、総務企画部広報課（写真）

※英語字幕をつけたオンデマンド配信も後日掲載



寶金総長から採択学生へのメッセージ動画



石森事業統括・理学研究院教授からの説明、採択生への激励



抱負を発表した代表学生
（左から、教育学院の戸野塚氏、医学院の梶原氏）



集合写真

新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施

新渡戸カレッジの学部教育コースでは、12月11日（土）、高等教育推進機構大講堂において、「新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会」を開催しました。このイベントは昨年度まで新渡戸学（フェローゼミ）の成果発表の場として、「新渡戸学（フェローゼミ）全体発表会」という名称で行われていましたが、発表に対する順位付けではなく、新渡戸学（フェローゼミ）、新渡戸学（アドバンストゼミ）での成果報告や意見交換を通じて視野を広げ、知識を深めることに重点を置くことを目的として、今年度より名称と内容を一部変更して実施されたものです。

新渡戸学（フェローゼミ）は、北大同窓生の新渡戸カレッジフェローが指導する少人数の演習形式の科目として平成28年度から開講され、新渡戸カレッジ基礎プログラム学部教育コースの学生を対象とした必修科目に位置付けられています。令和3年度は10月2日（土）の寶金清博総長の特別講演会か

ら始まり、現地視察を含めた全5回のゼミがすべて対面で実施されました。

新渡戸学（アドバンストゼミ）はオナーズプログラム学部教育コースの学生を対象とした少人数演習形式の科目で、8月12日（木）に開始し、フェローや関係者とともに実施した十勝への合宿等を中心に、グループ活動に取り組んできました。

対面で実施された公開シンポジウムには各ゼミテーマの関係者にも出席いただき、新渡戸カレッジ校長代理の山口淳二理事・副学長からの来賓挨拶の後、フェローゼミから8つの代表グループ、アドバンストゼミから1つのグループによる発表が行われました。

また、Slido^{※1}を利用した質疑応答ではフェローゼミ履修生から多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされました。各ゼミの堂々とした発表は、この日のために連日遅くまで準備を重ねてきた成果の表れと言えるでしょう。

すべての発表の後にはフェローゼミ統括の多田幸雄フェローからの講評、

並びに高大連携の面からこれまでフェローゼミにご支援いただいた北海道教育大学教職大学院の北村善春特任教授より、今後に向けての励ましのメッセージをいただきました。

イベントの最後にはフェローゼミ履修生の投票による学生大賞の結果が発表され、受賞ゼミのグループは令和4年度の新渡戸カレッジ入校式で新入校生を前に再び発表することが伝えられました。

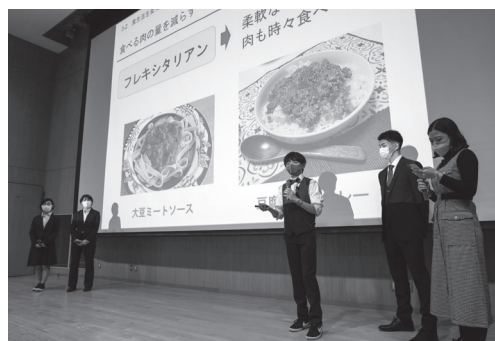
最後に、フェローゼミ及びアドバンストゼミをご指導いただいた各フェロー及び支援教員、ご協力いただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

（学務部教育推進課）

※1：イベント等でQ&Aなど参加者との双方向コミュニケーションに役立つ機能を提供しているWebサービス



会場全体の様子



発表の様子



来場者全員での記念撮影

令和3年度第2回新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催

新渡戸カレッジの大学院教育コースでは、12月18日（土）に令和3年度第2回新渡戸カレッジメンターフォーラムをオンラインにて開催しました。

社会の多様な分野で活躍する方々にメンターに就任いただき、新渡戸カレッジ生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。

メンターフォーラムは、新渡戸カレッジ生が大学院修了後のキャリアを念頭に、カレッジ生自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じ、自身のキャリアパスをより具体的に考える機会として、夏と冬の年2回開催されています。

当日は、第1部として講演会を行い、『キャリアパスを考える』のテーマで、7名のメンターに、ご自身のキャリアや実社会における経験に基づくアドバイス等について英語でご講演い

ただきました。新渡戸カレッジ生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩たちの話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

続く第2部では、新渡戸カレッジ生が各メンターに自由に質問し対話を行う交流会として実施しました。新渡戸カレッジ生は大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスを頂くこ

とができました。

本メンターフォーラムを通して、新渡戸カレッジ生は、大学院生活をどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていくことができるか等について、貴重な洞察を得ることができたようです。

（学務部教育推進課）



メンターと新渡戸カレッジ生

コロナ禍で困窮する学生への学生支援（第2回目）を実施

11月12日（金）、札幌キャンパスの学生1,500名、同月19日（金）に函館キャンパス200名に対して第2回目の学生支援として生活支援事業を実施しました。学生への支援事業の実施は、第1回目のアンケートの要望を受けて実施したものです。

第1回目は本年6月4日（金）に食料品を中心に支援を実施したところ、学生から大変好評であったこと、第2回目を期待する声があったこと、コロ

ナ禍で家族からの仕送りやアルバイト収入が減少している学生が多いことから、実施することとしました。

第2回目の支援は、第1回目と同じく北大フロンティア基金を原資とし、お米のほか、トイレットペーパー、ティッシュ、マスクなどの生活必需品を中心に支援を行いました。

なお、学生へ支援したお米の一部は、本学北方生物圏フィールド科学センターが大学敷地内の水田で収穫した

830kg（415名分）の「北大米」（ななつばし）を使用しました。

また、生活必需品の配付にあたっては、三密回避のため、事前に希望者の募集を行い、受取時間を指定して行いました。

今回の支援に対して、学生からの感謝の言葉とともに、今後の大学からの支援への期待も多数寄せられました。

（学務部学生支援課）



配付した支援物資（右下が「北大米」）



札幌キャンパスでの配付の様子



函館キャンパスでの配付の様子

令和3年度北海道留学生交流推進協議会総会をオンラインにて開催

令和3年度北海道留学生交流推進協議会総会をWeb会議システム（Cisco Webex）にて12月7日（火）に開催しました。会議には、北海道内の大学、短期大学、高等専門学校、地方公共団体、留学生支援団体から55名が参加しました。

はじめに、同協議会運営委員会委員長である山口淳二理事・副学長から「コロナウイルス感染症の世界的な拡大を受け、留学生数が大幅な減少となっている現状を受け、益々参加団体間の連携・協力関係を密にして留学生交流を支援していく必要があることから、これらの問題を議論する場として本協議会には大きな意義を持っている」旨の開会挨拶がありました。

引き続き、北海道大学学生相談総合センター留学生相談室長 石井治恵准教授による「コロナ禍の留学生相談：

留学生への心理的影響と相談体制の課題」と題した講演が行われました。コロナ禍初期に他大学が行ったアンケート結果を参照しながら、機会の喪失感や孤独感など留学生が抱える悩みについて、心理的影響が経時的に変化する過程が示されました。支援体制の課題として、留学生カウンセリングにおいても多様性やグレーゾーン事例に柔軟に対応することが求められていること、支援体制の仕組みを組織的に整えることと守秘義務との整合性の取り方など、現場で直面している課題について説明がありました。多様な相談体制の例が示され、規模や支援体制の異なる教育機関・各機関団体からは、講演後に具体的な質問が多く寄せられました。

各団体からの報告事項等として、医療通訳SEMIさっぽろ及び札幌国際大

学から新型コロナウイルスによる学生への影響に関し、支援内容を含む情報を共有していただきました。事務局からは、昨年11月現在の北海道内の大学、短期大学、高等専門学校への留学生の在籍状況、留学生向けの奨学金の紹介、各機関による事業、行事等実施状況等について説明が行われました。

会議の中では、最新情報を確認しながらの業務に奔走している参加者間で情報交換を行う場面もあり、各機関・団体において試行錯誤しながら、様々な取り組みを実施していることを共有する機会となりました。今後も、本協議会に参加している留学生受入機関と関係団体との協力体制が一層強化されることを期待しています。

（学務部学生支援課）



北海道大学内でのオンライン会議の様子



山口理事・副学長による開会の挨拶



学生相談総合センター留学生相談室長 石井准教授による講演の様子

総長と高等学校等との懇談会をオンラインで開催

12月27日（月）、寶金清博総長と高等学校等の学校長との懇談会をオンラインにて開催しました。高等学校等の教諭を対象とした入試説明会や進学相談会等で、北海道大学の特色や取組、入試制度等について説明する機会はこれまでもありましたが、本懇談会は、学校長と総長とが直接意見交換を行う初めての試みとして実現しました。

第1回目の今回は、寶金総長、山口淳二理事・副学長及び藤田 修総長補佐のほか、本学へ進学者を多く送り出している北海道内の高等学校・中等教育学校7校（公立5校、私立2校）の学校長がオンラインで出席しました。

最初に、山口理事・副学長から、本

学の理念や特色ある教育研究活動について説明があり、次いで寶金総長から、「北大は社会連携を非常に重視しており、企業や自治体、在学生や新入生の保護者の方々ともお話をしてきました。これまで高等学校等の先生方とお話する機会はなかったので、入試や高校生の状況など様々なご意見を聴かせていただきたい。」との挨拶の言葉が述べられました。

続いて、各学校長の先生方から、自己紹介及びそれぞれの学校の特徴的な取組等について紹介の後、意見交換に移り、出席者からは実施初年度となったフロンティア入試、道内高校生の進学に関する動向、新渡戸カレッジやサ

マーインスティテュート等による海外留学やオンラインによる国際教育の状況について質問や意見要望が寄せられ、寶金総長、山口理事・副学長及び藤田総長補佐からは、本学の現況のほか、今後目指していく方向性について説明がありました。

2時間ほどの懇談でしたが、北海道大学で学びたいという強い意欲をもつ生徒をより多く受け入れ、優れた人材を社会に送り出すため、高等学校等との連携をいっそう深めることの重要性を改めて認識する機会となりました。

（アドミッションセンター・学務部入試課）



意見交換をする寶金総長と山口理事・副学長



オンラインでの懇談の様子

2021年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rdBatch ファイナルデモンストレーションを開催

12月11日（土）、2021年度のDEMOLA HOKKAIDO 3rdBatchの最終発表の場であるファイナルデモンストレーションを開催しました。今回のファイナルデモンストレーションは新型コロナウイルス感染予防対策を取った上で2年ぶりの現地開催が実現しました。

オンラインとハイブリッド形式で実施し、本学の函館キャンパスの学生や、東北大学や東京理科大学の学生など遠方からも参加いただき、40名もの学生がプログラムに参加しました。企業は、株式会社デプロイネーチャー、北こぶしリゾート、日進化学株式会社にご参加いただき、本学の産学・地域協働推進機構も参加いたしました。個性あふれるメンバーの多様性が集合したチーム編成となり、様々なイノベーションアイデアが生まれました。また、リア

ル開催という事もあり、白熱したディスカッションが展開され、会場は大盛況となりました。

（詳細はこちら<https://00m.in/HeRRp>）

DEMOLAはフィンランド生まれの産官学連携イノベーション創出プラットフォームであり、世界16カ国、60以上の大学が参加している国際的な企業課題解決ネットワークです。学生と企業担当者が一緒にチームを組み、企業のリアルな課題解決に取り組むのが特徴です。文部科学省の次世代のアントレプレナーを育成するためのEDGE-NEXT事業の一環として2018年から日本では初めて、北海道大学が導入いたしました。約3年間をかけて25社28課題に取り組みました。これまでに参加した学生は、本学をはじめ小樽商科大

学、北海道情報大学、藤女子大学や札幌市立大学など様々な地域の19大学から集まり、延べ190名にも上っています。2020年度以降はフルオンラインでの開催体制も整えたことから、神戸大学、大阪大学や海外在住の学生の参加も実現いたしました。

現在、2022年度のDEMOLAにご参加いただける企業と学生の募集を行っています。ご興味のある方は産学・地域協働推進機構DEMOLA事務局（demola@mcip.hokudai.ac.jp）までお問い合わせください。

一緒にイノベーションアイデアを生み出す共同創造の場を体感しましょう。

（産学・地域協働推進機構）



株式会社デプロイネーチャーチーム



北こぶしリゾートチーム



日進化学株式会社チーム



北大チーム

アフリカルサカオフィスでの現地活動再開

アフリカルサカオフィスでは、10月末から日本留学海外拠点連携推進事業（サブサハラ・アフリカ地域）の留学コーディネーターがザンビアに帰任し、現地の活動を本格的に再開しました。

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大を受け、令和2年3月末からスタッフ全員が日本へ緊急退避したため、アフリカルサカオフィスは一時閉鎖となりました。その後、収束の見通しが立たず約1年半の閉鎖が続きましたが、その間も在ザンビア日本国大使館やJICAザンビア事務所と連絡を取り合い、ザンビアを含むサブサハラ・アフリカ地域の感染状況について情報収集を行うなど、事業活動をオンラインでも並行して実施可能にする基盤整備を進めてきました。

令和3年8月末以降、ザンビア国内の感染状況が改善傾向となったことを踏まえ、9月中旬以降、スタッフが順次帰任し現地活動を再開しています。

本オフィスが設置されているザンビア大学獣医学部をはじめ、多くの関係者は本オフィスの活動再開を非常に歓迎しており、同大学のルーク・ムンバ副学長からも、本学とザンビア大学のこれまで培ってきた学術交流の継続と日本留学海外拠点連携推進事業を通じた学生交流の活性化に期待する、とのコメントがありました。

11月20日（土）から24日（水）には、東京外国語大学の神代ちひろ特任助教が「大学の世界展開力強化事業—アフリカ諸国との大学間交流形成支援—」の一環でザンビア大学を訪れたこ

とから、本オフィスでは現地に戻った利を生かし、ザンビア大学関係者への表敬訪問の調整を支援するとともに、東京外国語大学と協働してザンビア大学社会学部の学生40名を対象とした日本留学説明会を開催しました。

一方で、新たな変異株「オミクロン株」に対する水際対策強化として、11月下旬より留学生の日本への入国が一時的に停止となり、留学予定の学生には再び厳しい状況となっています。日本留学を希望する若者たちがこの状況を乗り越えられるよう、アフリカルサカオフィスのスタッフは一丸となり感染予防対策を徹底したうえで現地に寄り添った活動展開を目指していきます。

（国際部国際連携課）

「日本留学海外拠点連携推進事業（ロシア・CIS）」による業界研究セミナーを開催

ロシアモスクワオフィスは11月17日（水）、文部科学省委託事業「日本留学海外拠点連携推進事業」の一環で、ロシア貿易のパイオニア的存在である大陸貿易の子会社、株式会社テクノソリューションとの共催により、日本企業への就職に関心を持つロシア人学生と企業との出会いの場を創出することを目的とした「業界研究セミナー」をオンラインで開催しました。

本セミナーは、ロシアモスクワオフィス所長の加藤博文教授（アイヌ・先住民研究センター長）の挨拶で幕を開け、続いて経済産業省通商政策局ロシア・中央アジア・コーカサス室の黒須利彦室長及び三井物産モスクワ有限会社の目黒祐志社長がロシアとの経済協力を謳った「8項目の協力プラン」や

日本企業が求める人材像等を中心とした基調講演を行いました。

また、一般社団法人ロシアNIS貿易会、独立行政法人日本貿易振興機構、さらにはロシアとの交流に積極的な北海道、新潟県及び富山県の5機関から、各組織の取組や日本企業への就職に関する情報等が参加者に提供されました。約3時間に及んだ本セミナーは、各参加者とその場で質疑応答するなどインタラクティブなセミナーとなり、株式会社テクノソリューションの坂口憲一取締役事業部長の挨拶をもって閉幕しました。

当日の参加者数は166名で、学部生のほか、修士課程や博士課程に在籍する大学院生、さらには社会人の参加もありました。セミナー登録時に実施し

たアンケートの結果によると、現役学生や社会人の多くが「日本企業の求人情報」や「日本企業に就職するために必要なスキル」に関する情報を求めており、自身のキャリア形成を意識した参加が多かったようです。

そのため、ロシアモスクワオフィスでは、日本留学に係る情報のみならず、留学後のキャリアパスを含めた魅力的な情報を提供できるよう、企業との連携をさらに進め、ロシアからの留学生誘致に取り組む予定です。今後もオンラインでの利点を生かし、日本企業とロシア人学生等との出会いの場を創出する機会を提供できるように努めてまいります。

（国際部国際連携課）

「第5回北海道大学フィンランドディ フィンランドの美しい冬景色を想って」を開催

12月5日（日）、欧州ヘルシンキオフィスは、北海道、北海道フィンランド協会、理学研究院、保健科学研究院、工学研究院の共催、フィンランド大使館、札幌フィンランド名誉領事館、札幌国際プラザの後援を受け、第5回北海道大学フィンランドディをオンライン形式で開催しました。

例年、フィンランドの夏至祭に合わせて、6月に開催していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、令和2年は中止に、令和3年は、対面開催を模索しつつも、やむなく断念し、オンラインでの開催が実現したものです。約160名が参加し、札幌のみならず、道内、道外、さらにはフィンランドからの参加もありました。

欧州ヘルシンキオフィス大橋俊朗所長（工学研究院教授）の開会挨拶の後、保健科学研究院の横澤宏一教授の

司会のもと、第1部では、高等教育推進機構の池田文人教授が「ムーミン物語における『顔』の意味」と題して講演を行いました。続いて、文学部4年生の高橋日菜さんから、「ヘルシンキ大学留学体験～コロナ渦でのフィンランド生活～」について、理学研究院の増田隆一教授から、「フィンランドと『ユーラシア動物紀行』」について発表が行われました。

第2部では、「フィンランドの伝統楽器カンテレと伝承歌、そして即興の伝統」と題して、カンテレ奏者・作曲家のあらひろこさんと札幌カンテレクラブのサルミアッキの皆さんによる歌とカンテレの録画映像を、サルミアッキのこうのちえさんの解説とともにお届けした後、附属図書館の千葉浩之係長が「ヘルシンキの新図書館Oodi: “世界一”の魅力に迫る」について講演を

行いました。

また、フィンランド大使館のニーナ・ヴァイサネン一等書記官が、水本秀明非常勤講師の通訳により「フィンランドのグリーンで持続的な未来」と題した講演を行い、フィンエアー東京支店の北川昌彦課長からフィンエアーの札幌便運航スケジュール及びサステイナビリティの取組についての紹介がありました。各講演者には、時間内にすべてを回答することができないほどたくさんの質問が寄せられ、視聴者のフィンランドに対する高い関心を感じた3時間半でした。

欧州ヘルシンキオフィスでは、引き続き、本学の教育・研究について積極的に発信していきます。

（国際部国際連携課）



講演開始前の司会者・講演者



「世界で一番幸せな国」の将来を語るヴァイサネン一等書記官

寶金総長が一带一路大学連盟オンライン会議に出席

12月10日（金）、寶金清博総長が一带一路大学連盟オンライン会議（2021 Online Conference of University Alliance of the Belt and Road）に出席しました。「環境保護と国際協力」をテーマとした今回の本会議には、中国をはじめとする世界22カ国から75大学・機関が参加しました。

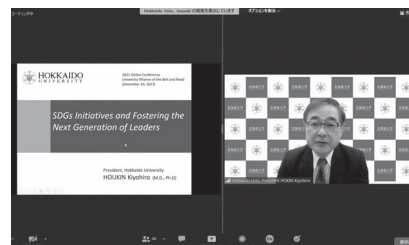
本会議では、中国甘肅省のZhang Shizhen副省長や在韓民国中華人民共和国大使館のXing Haiming大使らによる開会挨拶に引き続き、各国の大学代表者による講演が行われました。寶金総長は“SDGs Initiatives and Fostering

the Next Generation of Leaders”と題した基調講演を行い、SDGs達成に向けた本学の貢献や新渡戸カレッジ等を通じた次世代の育成に関する取組について紹介しました。本会議ではこの他に26の講演が行われ、生態系の保護と多様性における若者の役割や世界の貧困問題解決のための国際協力について各大学から発表が行われました。

一带一路大学連盟は2015年に設立された大学連盟で、現在27以上の国・地域の173大学で構成されています。本学は同連盟の加盟校ではありませんが、本会議の主催者であり本学大学間協定

校である蘭州大学からの招待により、出席する運びとなりました。

（国際部国際連携課）



基調講演を行う寶金総長

大連理工大学－北海道大学 協定締結10周年記念式典・大学交流デーを開催

12月17日（金）、大連理工大学（中国）との大学間交流協定締結10周年を記念し、記念式典及び北海道大学交流デーをオンライン形式で開催しました。

記念式典には、寶金清博総長及び大連理工大学の郭東明学長をはじめとする教職員及び学生等、約70名が参加しました。記念式典は、大連理工大学の王珏国際協力交流処副処長が司会を務め、開会・記念ビデオの上映の後、郭学長、寶金総長それぞれから挨拶がありました。続いて、在札幌中国総領事館の夏少傑副総領事及び在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所の等々力研所長から挨拶がありました。その後、記念品の交換と記念撮影が行われました。

次に、各大学の教員代表として、大連理工大学の崔瑤建設工學部准教授及び本学中国北京オフィスの惠淑萍所長から挨拶がありました。引き続き、本学工学院修士課程2年の石黒充さん及び大連理工大学材料科學工學院の梅爽さんの留学体験動画を視聴した後、北海道大学中国人留学生学友会

の韓天放会長から本学での留学生生活に関する紹介がありました。

その後、大連理工大学の李曉丹国際協力交流処副処長及び本学の川野辺創国際連携機構副機構長から各大学の国際交流プログラムの紹介が行われた後、プライスウォーターハウスクーパース社の藤本和也さんから、大連での生活と企業研修等の紹介がありました。



オンラインで握手をする寶金総長と郭学長



挨拶する惠中国北京オフィス所長

午後からは、工学研究院及び情報科学研究院において大連理工大学関係者との研究交流分科会が行われ、盛況の内に終了しました。

今後も国際連携機構では、協定校との連携拡大を促進し、教員や学生の相互交流を強化していきます。

（国際部国際連携課）



記念撮影



国際交流プログラムを紹介する川野辺副機構長

令和3年度第1回サステナビリティ推進員会議を開催

サステナビリティ推進機構は、12月8日（水）に、令和3年度第1回サステナビリティ推進員会議をオンラインで開催しました。本会議は、各部署等とサステナビリティ推進機構が連携・協力し全学一丸となって実行していく様々な活動について意見交換及び連絡調整を行うために開催するもので、合わせて89名の出席がありました。

SDGs事業推進本部長の横田 篤理事・副学長から開会の挨拶に引き続き、本会議の位置づけや背景、サステ

ナビリティ推進員等の業務内容について説明を行いました。

会議では、新保昌人施設部長より、省エネルギー対策の一つ一つは小さくても、全学で取り組めば大きな効果につながることから、各部署での推進員による啓発について協力依頼がありました。

また質疑応答のなかでは、施設のダイバーシティへの対応や、ネット・ゼロ・エネルギー・ビル（ZEB）への取り組みや工夫について質問があ

りました。

最後にサステナブルキャンパスマネジメント本部長の菅原修孝理事から閉会の挨拶があり、会議は終了しました。

サステナビリティ推進機構では、今後も引き続き、部署等と連携を図りながらサステナビリティ推進に関する活動を実施してまいります。

（サステナビリティ推進機構）

議題

1. サステナビリティ推進員制度について
2. 令和3年度冬季の省エネルギー対策の推進について（参考）令和2年度冬季の節電結果報告
3. サステナブルキャンパス評価システム ASSC（アスク）2020年度評価の結果報告
4. 「北海道大学施設設計標準」について
5. 施設に関する相談先について



開会の挨拶をする横田理事・副学長



オンライン会議の資料（抜粋）

博士人材と企業の情報交換会 第47回「赤い糸会」を対面で開催

人材育成本部のS-cubicでは、11月16日（火）に札幌グランドホテルにて、本年度第2回（通算第47回）「赤い糸会」を開催しました。

コロナ禍のため、昨年度からすべての情報交換会をオンラインで実施してきましたが、一部の企業や学生から対面実施の強い希望があり、さらに本学や企業においてワクチンの職域接種が進んだことから、本年度第2回目の赤い糸会は万全の対策を取った上で対面での実施といたしました。本会は、企業には博士人材の高い専門性や総合力を理解いただき、博士人材には企業の研究開発活動や企業における博士人材の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で通算47回目の開催となる「赤い糸会」は、本学の博士人材は7部局25名、連携大学からは博士人材3名（新潟大学1名、兵庫県立大学1名、

立命館大学1名）、企業からは17社32名、オブザーバ大学から2校2名が参加しました。

本会では、冒頭の人材育成副本部長の出村 誠生命科学院教授による開会挨拶、赤い糸会担当の吉原拓也特任教授による趣旨説明の後、企業から業界動向や博士人材の活躍状況等の紹介が行われ、その後、博士人材の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行なわれました。情報交換交流会では、人材育成副本部長の山口淳二理事・副学長より開会挨拶及びエンレイ賞の表彰がありました。

開催後、企業からは、「やはり対面で会話することで、オンラインではできない交流ができた。現地で開催する意義を強く感じる会だった。」「博士課程の良い人材を知る良い機会だった。現地開催の機会は是非続けていきたい。」との声をいただくことができました。また参加した博士人材か

らは、「オンラインでの赤い糸会でもかなり勉強になったが、やはり対面での交流のほうが非常に有意義であると感じた。」「対面で企業の方と気さくに交流できるのは赤い糸会ならではの、非常に貴重な体験となった。」といった嬉しい声も聞かれました。

人材育成本部では上記の活動のほか、Advanced COSA, J-window（個別キャリア相談）、キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップや、コンソーシアムの連携大学である東北大学や名古屋大学等が運営するプログラムの活用などによって、博士人材の実践力を高めております。今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページを是非ご覧ください。
<https://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



出村人材育成副本部長の開会挨拶



山口人材育成副本部長の開会挨拶



博士人材のポスター発表



企業との個別情報交換

外国人博士人材と企業の情報交換会 CAREER LINK MEETUP 2021（英語版赤い糸ONLINE）を開催

人材育成本部I-HoPは、11月30日（火）に外国人博士人材（DC・PD）と国内企業の英語による情報交換会「CAREER LINK MEETUP 2021 -For international DC and PDs-」を開催しました。

今回が3回目の開催となる本イベントは、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、昨年度に引き続きオンラインでの開催となりました。

アステラス製薬株式会社をはじめ国内企業10社、DC・PDは「連携型博士研究人材総合育成システム」による連携大学からの参加者を含む40名が参加しました（東北大学7名、横浜国立大学6名、立命館大学3名、沖縄科学技術大学院大学1名）。

当日は山口淳二人材育成本部長の挨拶

に始まり、各企業のショートトークの後、ブレイクアウトルームに分かれて、博士人材による自己の研究内容やスキルのプレゼンテーション、企業によるブースセッションと、全て英語による密度の高い交流が行われました。参加した学生からは「日本企業の採用の条件と、その基準をクリアするために何をしなければならないかが明確に理解できました」、企業からは「非常に良いと思います。外国籍高度人材が卒業後も日本で活躍していただける場を提供できるよう、今後も本プログラムをご支援させていただきたいと考えております」とのコメントが寄せられました。

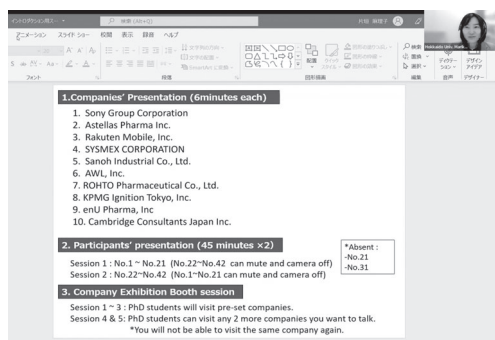
本学の博士後期課程は留学生が約3

分の1を占めており、外国人博士人材のキャリア支援は喫緊の課題となっています。I-HoPでは、これまで人材育成本部が構築してきた主に日本人博士人材向けのキャリア構築支援プラットフォームを、外国人博士人材も意識したグローバルな支援体制として拡張し、外国人DC・PDの日本でのキャリアパスを広げるため様々な取り組みを行っています。中でも国内企業との英語による交流機会の創出は企業や連携大学からの注目度も高く、ひいては外国人留学生の日本国内での就職率向上に寄与するものとして、今後も継続開催が期待されています。

（人材育成本部）



山口本部長による開会挨拶



片垣特任助教による趣旨説明

北海道大学・東北大学・名古屋大学合同シンポジウムを開催 ～連携型博士研究人材総合育成システムシンポジウム2021～

11月18日（木）、本学は東北大学及び名古屋大学とともに「連携型博士研究人材総合育成システムシンポジウム2021」をオンラインにて開催し、1年間の活動成果を報告しました。

これは平成26年度から実施している文部科学省「科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業」の一環で行われたもので、本年度は事業の最終年度にあたります。

本事業の目的は、3大学（北海道大学、東北大学、名古屋大学）が相互の研究人材育成資源を結集し、多様な分野を対象にした次世代研究人材育成システムの構築を図ることです。若手研究者、DC・PDを対象とした2つの人

材育成支援プログラム「次世代研究者育成プログラム（助教事業）」「イノベーション創出人材連携育成プログラム（イノベ事業）」を推進しています。

今年度のシンポジウムには約154名が参加し、事業全体の報告と各プログラムからの報告等に熱心に耳を傾けました。

当日は開会挨拶のあと、文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課人材政策推進室の三輪善英室長より、文科省における博士学生への支援に関する取り組みについて講演をいただきました。続いて本学の吉原拓也特任教授（コーディネーター）による活動報告のあと、株式会社東芝・研究開発セン

ターの水島公一氏より「小さな基礎研究」というテーマで講演をいただきました。

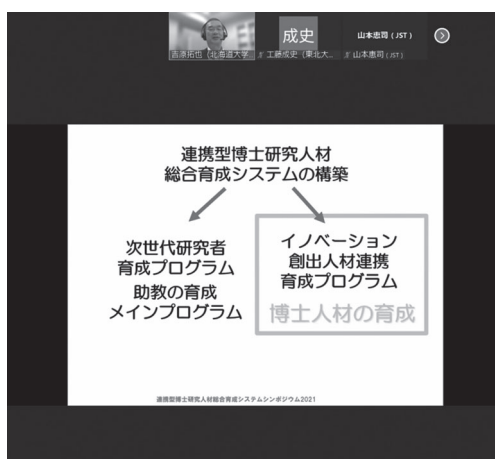
後半は、「あそび」をキーワードにした博士の生き方と題し、既にアカデミアや民間企業に就職をした30代の先輩方によるパネルディスカッションが行われ、参加をしてる学生も含め、積極的に意見交換がなされました。

東北大学の安藤晃大学改革推進センター長が閉会の挨拶を行い、成功裡に終了しました。

（人材育成本部）



山口本部長による開会挨拶



吉原特任教授による説明

中学生対象 体験型理科実験教室 『「感じて」動くロボットを作るには』開催

人材育成本部ダイバーシティ研究環境推進室と大学院情報科学研究院は、公益財団法人KDDI財団と共催で、12月18日（土）、大学院情報科学研究院において、中学生対象の体験型理科実験教室『「感じて」動くロボットを作るには』を開催しました。本企画はKDDI財団の「青少年啓発・育成活動助成」により実施しています。

市内の中学生に参加を募ったところ定員の3倍を超える応募があり、抽選により選ばれた9名と保護者が参加し

ました。

大学院情報科学研究院の小林孝一准教授が講師となり、内容の説明の後、まずは車輪型移動ロボットの組立をしました。ロボット完成後、TAの大学院生によるサポートを受けながらロボットにプログラムを入力し、指示通りに紙に書かれた黒い線の上を外れないで動くよう調整を繰り返しました。

当日は、多くの報道機関が取材に訪れるなど、世間の関心の高さを実感しました。また参加者アンケートの結果

も非常に好評だったことから、今後も内容を進化させつつ、継続的に事業を実施したいと考えています。

ダイバーシティ研究環境推進室では、女子を中心とした中高生に対し、様々な理系進路選択支援の取組を行っています。その他ダイバーシティ研究環境推進室の活動については、こちらのWebサイトをご覧ください。

<https://reed.synfoster.hokudai.ac.jp/>

（人材育成本部）



情報科学研究院の小林准教授



ロボットを組み立てる中学生



ロボットの走行実験

■ 部局ニュース

令和3年度理学院優秀研究奨励賞授与式を挙

理学院では、12月17日（金）に理学部大会議室において、令和3年度理学院優秀研究奨励賞授与式を挙

この賞は、理学に関する優れた研究を推進する学生を表彰し、研究のさらなるステージアップを支援することを目的に、博士後期課程学生1年生及び

2年生を対象として平成30年4月に設けられました。

今年度は、創造性に富む卓越した研究計画を立案し、これに取り組んでい

授与式では、永井隆哉理学院長から、この賞の趣旨説明とお祝いの言葉が述べられた後、表彰状が一人ひとり

に手渡されました。今後も、この賞が本学院学生の基礎科学に関する深い洞察力と創造性、研究立案能力の向上を一層喚起するものとなることを期待しています。

（理学院）



賞状を受け取る受賞者



今年度の受賞者と永井学院長（中央左）、
金川眞行理学・生命科学事務部長（中央右）

総合博物館来館者200万人達成！

総合博物館は1999年4月に開館し、開館10年目の2009年10月には50万人、2014年7月には100万人の来館者を達成、2016年7月のリニューアルオープンを経てからは2017年度以降、年間20万人以上の来館者をお迎えしています。2020年以降はコロナ禍による3回の臨時休館期間もありましたが、開館22周年を迎えた12月16日（木）に来館者数が通算200万人を達成しました。

200万人目の来館者となったのは札幌市内在住の栗野 桂くん（4歳）です。お母様と大人気の企画展示『トガリネズミ展』を楽しみに見に来ていたそうです。おふたりからは「トガリネズミを見ることができ、楽しかった。また総合博物館に来たい！」とコメントを頂きました。

200万人達成記念セレモニーでは、小澤丈夫館長から200万人目の記念証書を、山本文彦理事・副学長からは、

挨拶と大学院生が開発したミュージアムグッズを記念品として贈呈されました。司会はミュージアムマイスターの高田健太郎さん（理学院修士課程2年）が務めました。

これからも総合博物館は感染症対策に十分留意し、皆様のご来館をお待ちしております。

（総合博物館）



200万人達成記念祝いのくず玉割り



山本理事・副学長より桂くんへ記念品贈呈



200万人目となった栗野さん親子を囲んで記念撮影
（左から司会の高田さん、山本理事・副学長、栗野さん親子、小澤館長）

工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催

工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センターでは、毎年「こころの健康セミナー」を開催しています。

本年度は、12月10日（金）に「工学系部局なんでも相談室」カウンセラーである石原一人氏（合同会社アド・レジリエンス カウンセラー）を講師としてオンライン講演形式により開催しました。

本セミナーでは『続・今年度の「なんでも相談室」利用状況から見てきたこと』と題して、新型コロナウイルス感染防止対策の状況下で、昨年度及

び本年度における「なんでも相談室」利用状況を振り返るとともに、これから起こり得る問題や課題への対処と予防について解説が行われ、参加した教職員はその認識及び理解を深めました。参加者からは有益であった旨の感

想が多く寄せられ、有意義なセミナーとなりました。

（工学院・工学研究院・工学部、
情報科学院・情報科学研究院、
量子集積エレクトロニクス研究センター）



講演する石原氏



セミナーの様子

令和3年度第1回農学研究院FD研修会を開催

農学研究院では、12月1日（水）に農学部大講堂において、令和3年度第1回FD研修会を開催しました。西邑隆徳農学研究院長の開会のあいさつの後、「北大教職員に最低限知っていただきたい産学連携に関するポイント」をテーマに、産学・地域協働推進機構副機構長（兼）産学連携推進本部長の寺内伊久郎教授による講演が行われました。今回のFDでは、産学連携における共同研究制度及び学術コンサルタント制度の概要、教職員が注意すべきポイント、並びに特許取得へ向けた注意点などについて解説いただきました。

講演では産学連携は、企業と連携して新技術開発や新事業創出を行うことを通じて、大学が社会貢献を実現する手段の一つであり、北海道大学の教職員が取り組む具体的な産学連携制度としては、共同研究制度（民間企業等と、対等な立場で共通の課題について研究に取り組む）、学術コンサルタント制度（教育、研究及び技術上の専門的知識に基づいて指導又は助言を企業に対して行う）、産業創出講座（大学と企業が相互に人材を提供し、組織対組織の大型共同研究を推進する。現在

25企業が学内に講座を設置）、受託研究制度（国や企業等からの委託を受けて研究を行いその成果を委託者に報告する）などが紹介されました。

研究の内容や企業の要望により活用される制度は異なりますが、共同研究の場合、学術コンサルティングを通して準備を整え、その後共同研究を実施し、さらなる発展が期待される場合は産業創出講座を設置する、といった段階的な制度の活用も可能とのことでした。

講演の中で寺内先生が強調されたことは、「まずは産学・地域協働推進機構に相談してほしい」ということでした。特に共同研究費の決定は、顔見知りからの依頼の場合、相手の言い値で引き受けてしまいがちですが、これは共同研究や知的財産の価値を下げてしまう原因にもなることから、内容を承認する前に産学・地域協働推進機構に相談するほうがよいこと、さらに、特許につながる研究の場合は、特許出願前に論文発表してしまうと新規性が失われ出願できなくなるなど、より慎重な対応が求められることから、発表前の段階で相談しておくのが安全とのことでした。

質疑応答では、具体的な事例につい

での質問が挙げられ、参加した教員49名、職員3名も今回の講演会を通じて深めた知識により、企業との連携方法を活用した大学の社会貢献活動が益々活発となっていくものと期待が持てる貴重な機会となりました。講演いただいた寺内教授には、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

（農学院・農学研究院・農学部）



西邑農学研究院長による開会のあいさつ



寺内教授の講演の様子

国際広報メディア・観光学院の学院生がSDGsをテーマに取材・制作した動画が北海道放送で放映

国際広報メディア・観光学院の授業の一環として、北海道放送株式会社（HBC）がインターンシップを実施し、その活動成果が番組化され12月31日（金）に放送されました。

同インターンシップは、8月16日（月）から10月26日（火）にかけてオンラインを中心に実施されました。選抜された学院生3名が参加し、HBCの指導の下、SDGsの17のゴールから学生自らがテーマを考え、取材先選定や取材交渉、構成台本案の制作から、

実際の取材、動画の撮影や編集に至るまで、番組制作の一連の流れを体験しながら動画を作成しました。

その活動成果をHBCが15分に再編集し、「学生から見たSDGs北海道から未来へ」というタイトルで番組化しました。

コロナ禍ということもあり、HBCにとっても初めてのオンラインを中心としたインターンシップとなりましたが、複数回にわたる指導と意見交換により、HBCと学院生の双方にとって、

対面にも劣らない成果を出すことにつながりました。

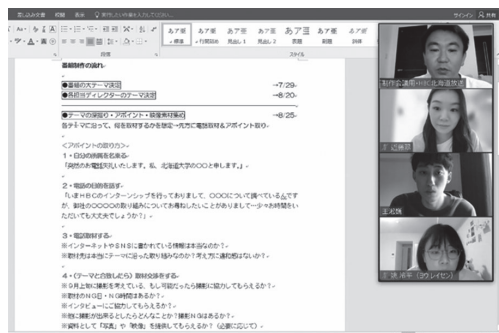
学院生3名が選んだテーマは、それぞれ「フードロス削減へ 北大でスゴい研究」（王 淞巍さん）、「日本でも徐々に認知「生理への理解」（姚 冷芊さん）、「廃材アートで個性伸ばす取り組み」（近藤 翠さん）で、SDGsのゴールに対応したものとなっています。

（国際広報メディア・観光学院）

学院生の取材・動画作成テーマと対応するSDGsのゴール

学院生	SDGsのゴール	取材・動画作成テーマ
王 淞巍	9 産業と技術革新の基盤を作ろう 12 つくる責任 つかう責任	「フードロス削減へ北大でスゴい研究」
姚 冷芊	5 ジェンダー平等を実現しよう	「日本でも徐々に認知「生理への理解」」
近藤 翠	4 質の高い教育をみんなに 12 つくる責任 つかう責任	「廃材アートで個性伸ばす取り組み」

（注）数字は、SDGsの17のゴールに該当する番号



オンライン打ち合わせの様子



番組カット

低温科学研究所技術部で第27回技術報告会を開催

12月3日（金）、低温科学研究所講堂において低温科学研究所技術部、技術支援本部共催による第27回技術報告会を開催しました。

報告会では、11件（うち1件は要旨のみ）の低温科学研究所技術部が関わった研究発表や技術報告が行われ、学

外の参加者からも研究発表が行われました。

例年同様、専門領域を越えて多様な分野の研究に触れる貴重な場となり、延べ30名弱の研究者・技術職員・学生などが参加し、活発な意見が交わされました。

本報告会の内容をまとめた「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第27号」を発行しました。報告集は本研究所技術部ウェブサイトをご覧ください。

◆ <http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



渡辺 力技術部長による挨拶



技術報告会の様子

附属図書館（北図書館）において学部選択関連の図書展示を実施

附属図書館(北図書館)では、10月5日（火）から11月25日（木）にかけて、学部選択に関する2つの図書展示「学部選択参考図書展示」「バランスドオーシャン×北図書館連携展示」を実施しました。

「学部選択参考図書展示」はラーニングサポート室と協同して毎年実施しており、それぞれの学部に進んだ自分をイメージできるような図書31点に加

え、ラーニングサポート室作成のアカデミックマップを展示しました。期間中に、展示図書28点が延べ59回貸し出されました。

また「バランスドオーシャン×北図書館連携展示」は、水産科学研究院バランスドオーシャン運用部と協同し、今年度に初めて実施した企画です。水産学関連図書31点、各図書に関する教員からのコメントやバランスドオーシャ

ンのWEB教材へリンクするQRコードを展示したほか、オンライン動画教材「LASBOS YouTube」をミニサイネージで上映しました。期間中に展示図書21点が延べ41回貸し出されました。

どちらの展示も多くの1年生が閲覧しており、学部選びの参考となる機会提供の場となりました。

（附属図書館）



学部選択参考図書の展示



バランスドオーシャン×北図書館の連携展示

附属図書館でMendeleyオンライン講習会を開催

附属図書館では12月3日（金）、8日（水）、10日（金）にエルゼビア・ジャパン株式会社の井上淳也氏を講師に招き、「Mendeley（メンデレー）オンライン講習会」をZoomにより開催しました。

Mendeleyは、学術文献の管理とオンラインでの情報共有を目的とした無料の文献管理ツールであり、多数の文献管理を必要とする学生や教員からも注目されています。

前回（6月）の開催時には、「日本

語コース」「英語コース」として留学生向けに英語での解説の機会を設けましたが、今回は使用言語を日本語に統一して「基礎編」「応用編」という形で実施しました。

「基礎編」は、好評を博した前回の「日本語コース」と同じ内容で、アカウントの取得からプラグインのインストールをはじめ、実際の文献の管理方法までMendeleyの使い方を一通り習得する形で実施しました。

また、本学で初めて開催した「応用

編」では、科学英語論文の投稿の際に必要な基礎知識とともに、論文執筆に役立つ一歩進んだMendeleyの使い方の解説があり、学生のみならず多くの論文を執筆する教員にとっても有意義な内容となりました。

参加者数は全日程合計で基礎編79名、応用編56名、延べ135名の参加があり、多くの方から高い関心が寄せられていました。

（附属図書館）

はじめての方も
既にお使いの方も

文献管理はお任せ！
論文執筆にも役立つ

Mendeleyオンライン講習会

※本セミナーはZoomを利用したウェブセミナーです。

● 基礎編

12/ 3 (金) 13:00-14:30
12/ 8 (水) 10:30-12:00

第一部、第二部のみの参加もOK！

第一部：セットアップ編（30分）
アカウント取得からインストールまで講師と一緒にセットアップからはじめます。

第二部：実際の使い方編（50分）
初めての方向けに講師が一緒に実演します。

● 応用編

12/ 8 (水) 13:00-14:30
12/10(金) 13:00-14:30

科学英語論文執筆の前準備から論文執筆に役立つMendeleyの使い方を講師がーから解説。引用文献リストの作成など便利な機能を紹介します。

<対象>
本学構成員

<講師>



エルゼビア・ジャパン
井上淳也氏

<申込>
事前登録制です。
以下よりお申込ください。
※申込後、講習会に参加するためのURLをメールでお知らせします。



<https://www.lib.hokudai.ac.jp/?p=95792>

<お問合せ先>

● 基礎編：
附属図書館 学習支援企画担当
nref@lib.hokudai.ac.jp

● 応用編：
理学部図書室 sci@lib.hokudai.ac.jp
地球環境図書室 env@lib.hokudai.ac.jp

開催告知ポスター

和歌山研究林でアートプロジェクト「森のちからXII」を開催

北方生物圏フィールド科学センター
和歌山研究林では、11月11日（木）から12月10日（金）にかけて、アートプロジェクト「森のちからXII・森と響く」を開催しました。

本プロジェクトは、熊野にアーティストを招待し、森の中での作品制作や地域交流イベントなどを通じ、熊野地方の自然豊かな森の魅力や芸術文化を広く発信する催しです。NPO和歌山芸術文化支援協会（waccs）によって平成25年から毎年取り組まれています。和歌山研究林では令和元年に続き、コロナ禍で1年延期されていましたが、今回は2度目の開催となります。

静岡県より美術家の大矢りかさんが招かれ、研究林内の山深い谷底で辛うじて陽の光が当たる場所に生えた大きなトチの木を下地に、林内各所から拾い集められた枝葉やコケを組み合わせ、空中に浮かぶ全長8mあまりの巨大な「舟」が制作されました。

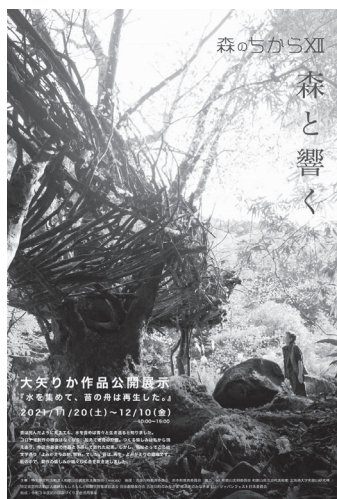
「水を集めて、苔の舟は再生した。」というタイトルのこの作品には「よみがえり」や「再生」の意味が強く込められており、長引くコロナ禍で芸術活動ができず引退までも考えた大矢さんご自身の「復活」のメッセージも重ねられています。

しかし一方で、枝葉により作られた「舟」は時間の流れと共にいずれ朽ちて無くなり、土の中へ還っていく運命にあります。それもまた、大矢さんのこれまでの活動においての一貫したテーマである「無常」という、決して悲観する必要のない命のはかなさ・かけがえのなさが表現されています。

公開された作品は県内外から多くの見学者が訪れたほか、作品鑑賞や和歌山研究林の見学会を組み合わせた地域の方々向けのアート・ツアーや地元小学校でのアート・ワークショップも行われ、コロナ禍において、可能な限りの感染症対策を講じながら、本プロジェクトを盛況のうちに終えることができました。

（※）本作品は自然に朽ちて跡形も無くなるまでの間、常時展示しております。個別のご見学に応じることも可能なので、入林の方法や交通手段などの詳細につきましては和歌山研究林まで直接お問い合わせください。

（北方生物圏フィールド科学センター）



森のちからXII 公開展示の案内ポスター



制作された作品「水を集めて、苔の舟は再生した。」



アート・ツアーの様子（作品鑑賞）



アート・ツアーの様子（制作者による解説）

スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際ワークショップ 「権威主義的統治の制度と戦略」開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、12月8日（水）から10日（金）に、本年度の冬期国際ワークショップ“Authoritarian Governance: Institutions and Strategies”をオンラインで開催しました。

例年は2日間の国際シンポジウムを開いていますが、コロナ禍を受けてのオンライン開催では、欧米からの報告者が多いプログラムの場合、1日にいくつものセッションを設けることは時差の関係で困難です。そこで今回は規模を縮小し、1日1セッションずつ3日間にわたるワークショップを開くことにしました。企画は、科研費基盤研究（A）「権威主義とポピュリズムの台頭に関する比較研究」（代表：宇山智彦教授）を中心に立てました。

近年の世界的な民主主義の後退によって、権威主義体制は政治学の中で注目されるテーマになりましたが、非民主的な体制がどのように生き延びるの

かという古典的な問題設定を超えて、日常的な統治構造を比較の観点から明らかにする研究はまだ多くありません。権威主義が統治システムとしてどのように機能しているのか、統治は効率的なのか非効率的なのか、どのような制度と戦略が用いられているのかなど、解明・議論すべき論点は多くあります。このワークショップでは、旧ソ連地域を中心としながら、東南アジア、東アジア、中東にも目を配ってこれらの問題を検討しました。

1日目の第1セッションは「権威主義体制における非公式政治と統治の状態：ロシア」、2日目の第2セッションは「開発途上地域の国家と社会：中東とコーカサス」、3日目の第3セッションは「危機への独裁者の反応と体制の強度：東南アジアと東アジア」をそれぞれテーマとしました。

全体を通して、権威主義体制のもとでの地方政治、社会制度、抑圧、腐敗

などの実態を、理論と実証の両面から分析する方法が議論されました。権威主義体制の民主化について提起された新しい見方や、コロナ禍への対応でいくつかの国の強権的な体制が露呈させた統治能力の低さに関する分析は、特に刺激的でした。

最近の国際政治においては、権威主義体制への批判が大国間競争に利用されたり、逆にコロナ禍への対応が権威主義体制の正当化に利用されたりして、単純な議論が横行しがちですが、権威主義体制の多様性及び強さと弱さを的確に把握することの重要性が、このワークショップで改めて確認できました。

参加者は実数で77人、3日間の延べ人数で125人にのぼり、活発な議論が行われました。

（スラブ・ユーラシア研究センター）

Slavic-Eurasian Research Center 2021 Winter International Workshop

Authoritarian Governance: Institutions and Strategies

December 8-10, 2021
Language: English / 使用言語: 英語 (Hokkaido University)

Program

December 8 (Wed.)

Opening Remarks 9:50-10:00 (GMT+9)
Tomohiko Uyama (SRC)
Masaaki Higashijima (Tohoku University)

Session 1. 10:00-12:00 (GMT+9)
Informal Politics and Governability in Authoritarian Regimes: Russia
Papers: David Szakonyi (George Washington University), Masatomo Torikai (Japan Society for the Promotion of Science / Keio University), Evgenia Olimpieva (University of Chicago)
Discussant: Natalia Forrat (University of Michigan)
Chair: Manabu Sengoku (SRC)

December 9 (Thu.)

Session 2. 16:30-18:30 (GMT+9)
Between State and Society in the Developing World: The Middle East and Caucasus
Papers: Ellen Lust (University of Gothenburg), Yu Tachibana (Hokkaido University)
Discussant: Scott Radnitz (University of Washington)
Chair: Masaaki Higashijima (Tohoku University)

December 10 (Fri.)

Session 3. 10:00-12:00 (GMT+9)
Regime Strengths and Autocrats' Reactions to Crises: Southeast and East Asia
Papers: Dan Slater (University of Michigan), Ayame Suzuki (Doshisha University)
Discussant: Lee Morgenbesser (Griffith University)
Chair: Yuko Kasuya (Keio University)

Venue Online with Zoom
(Hosted by the Slavic-Eurasian Research Center [SRC], Hokkaido University, Sapporo, Japan)

Details & Online Registration ※Please register by December 6 / ウェブでの事前登録をお願いします (12/6 締切)
<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2021winter/>

Organized by Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
TEL: 011-746-2388 FAX: 011-746-4952
E-MAIL: src@slav.hokudai.ac.jp URL: <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>

Sponsored by JSPS KAKENHI Grant Number 18H03619
(Comparative Study of the Rise of Authoritarianism and Populism)

QR Code: Details & Online Registration URL

2021年度冬期国際ワークショップポスター

「脳科学研究教育センターオンライン研究発表会」の開催

脳科学研究教育センターでは、11月29日（月）、発達脳科学専攻履修生によるオンライン研究発表会を行いました。例年は北広島クラッセホテルにおいて1泊2日の合宿研修を行っていましたが、昨年度に引き続き今年度も新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大防止のため合宿研修は取りやめ、代わりにZOOMミーティングを利用したオンラインの発表会となりました。

発表会には、文学、教育学、理学、生命科学、医学、薬学、保健科学の各研究院・学院・学部属する基幹教員15名、大学院生17名（うち発表者は15名）、その他7名、事務職員1名の合計40名が参加しました。

発達脳科学専攻履修生による研究発表はⅠ～Ⅳのセッションに分け、それぞれ3～4名の大学院生が質疑込み15分の持ち時間で発表を行いました。ZOOMの画面共有機能を利用してスラ

イドを発表し、その後質疑の時間を取りましたが、今回は発表中にもチャット機能で質問することもできたので、時間いっぱいまで活発な質疑応答がありました。今回はオンラインということもあり、学部生も含めて発達脳科学専攻履修者以外の学生も聴講できたため、履修生が様々な分野の脳科学研究の理解を深めるだけでなく、脳科学研究教育センターの活動や履修生の研究成果を学内に発信することができました。

また、終了後の参加者全員による投票で、生命科学院修士課程2年の木内和秀さんが優秀発表賞に選ばれました。発表会終了後の意見交換では、「学生からの質問が少ないので、来年からは発達脳科学専攻履修生に指定討論者を指名してはどうか？」という意見も出されました。来年度からの課題としたいと思います。

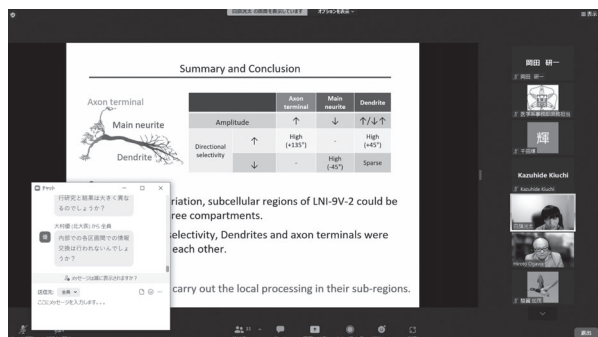
さらにアンケートでは、オンライン

講義について学生側からの様々な意見を聞くことができ、教員にとっても大変有意義なものとなりました。

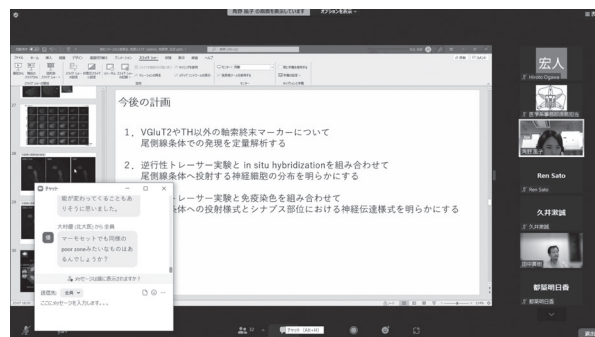
今年度もオンライン研究発表会となりましたが、合宿研修はとすると所属研究室の研究テーマや実験手法のみに偏りがちな大学院教育を、分野の垣根を越えて融合させることを目指す本センターの最も重要な活動の一つとなっています。終了後のアンケートでも「現状ではオンラインでも仕方がないが、来年の発表会はやはり合宿形式でやりたい」という要望が多数寄せられました。

一日も早くCOVID-19の感染が収束し、再び合宿研修を行って、懇親会も含めて部局を越えた学生と教員が交流できるようになることを祈ります。

（脳科学研究教育センター）



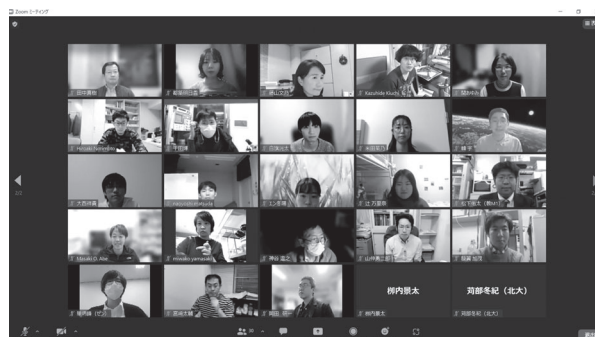
発表の様子①



発表の様子②



発表最優秀賞の受賞発表の様子



参加者集合写真

■博士学位記授与

12月24日（金）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は24人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は4人でした。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

（学務部学務企画課）

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（水産科学）	ナ ム グ ン NAMGUNG ジ ン JIN	Immunobiochemical, molecular biological, and reverse genetical studies on vitellogenin receptor candidates in medaka, <i>Oryzias latipes</i> （メダカ <i>Oryzias latipes</i> におけるビテロジェニン受容体候補に関する免疫生化学的、分子生物学的、及び逆遺伝学的研究） 主査：教授 都木 靖彰
博士（環境科学）	ホウ チュウハク 方 獅博	大雪山国立公園におけるインタープリテーションとリスクコミュニケーションに関する事例研究 主査：教授 山中 康裕
	コ ン バ KOMBA ア ツ ベ リ エ Atupelye ウェ ス ト ン Weston	Savannah disturbances and human-wildlife coexistence inside and around East African protected areas （東アフリカの自然保護地域内外におけるサバナの攪乱と人間・野生動物の共存） 主査：教授 渡邊 悌二
博士（理学）	た む ら と も ひ さ 田村 智弥	Petrology and geochemistry of the 1991 Pinatubo eruption, Philippines: Implications for the pre-eruptive processes and their time scale （フィリピン、1991年ピナツボ火山噴火の岩石学および地球化学：噴火準備過程と時間スケールの解明） 主査：教授 中川 光弘
博士（農学）	ふ く だ よ う す け 福田 洋介	穀物の国際価格上昇が日本の経済及び農業に及ぼす影響評価－マクロ経済及び地域経済に及ぼす影響の分析－ 主査：教授 近藤 巧
	に っ た 日田 アトム	直接支払いが稲作の所得と生産性に及ぼす影響に関する計量経済学的研究－農業者戸別所得補償制度を対象として－ 主査：教授 山本 康貴
博士（生命科学）	グ オ ユ ン デ ヨ ウ 郭 雲舟	Study on facile fabrication of super strong cellulose hydrogel with anisotropic hierarchical fibrous structure （異方的階層繊維構造を持つ超高強度セルロースハイドロゲルの簡便な製造に関する研究） 主査：教授 龔 劍萍
博士（保健科学）	ユ ン シ ャ ン 雲 杉	地域在住高齢者の作業機能障害に着目した介護予防アプローチの検討 主査：教授 千見寺 貴子
博士（工学）	や は ぎ し ゅ う い ち 矢作 修一	A study of direct data-driven control and its application to automobile systems （データ駆動制御と自動車システムへの応用に関する研究） 主査：教授 梶原 逸朗
博士（理学）	ス ナ ン ダ Sunanda バ イ ジ ャ Baidya	Study on the Pharmacological Effects of Organogermanium Compound THGP on RIG-I-Mediated Viral Sensing and Viral Replication during Influenza a Virus Infection （インフルエンザウイルス感染時におけるRIG-Iを介したウイルス認識およびウイルス複製に対する有機ゲルマニウム化合物THGPの薬理学的効果に関する研究） 主査：教授 村上 洋太
	リ ュ ウ ラ ン 刘 冉	High-Pressure Synthesis, Crystal Structures and Physical Properties of A-Site Columnar-Ordered Quadruple Perovskites （Aサイト柱状秩序型四重ペロブスカイトの高圧合成と結晶構造と物性） 主査：教授 上野 貢生

博士の専攻 分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（工学）	間藤 芳充 まとう よしのぶ	Consecutive Cyclization as a Simple and Efficient Synthetic Strategy for Multicyclic Polymers （連鎖的環形成による簡便かつ効率的な多環状ポリマーの合成） 主査：教授 松本 謙一郎
博士（医学）	安東 悟央 あんどう のりひろ	ラットの短時間心筋全虚血モデルにおけるトレハロース前処置の効果の検討 主査：教授 安斉 俊久
	江畑 信孝 えばた のぶたか	胆嚢癌におけるゲノムおよび遺伝子発現解析による分子分類 主査：教授 福原 崇介
	大平 将史 おおひら まさみ	肝細胞癌の進展における表皮型脂肪酸結合タンパク質の機能解析 主査：教授 谷口 浩二
	松井 博紀 まつい ひろき	浸潤先進部の病理学的プロファイルを用いた大腸癌新規予後層別化因子の開発に関する研究 主査：准教授 七戸 俊明
	Natalie Marie Linton ナタリー マリー リントン	Estimation and application of epidemiological parameters of COVID-19 （新型コロナウイルス感染症における疫学パラメータの推定と応用） 主査：教授 渥美 達也
	小林 道 こばやし とおる	日本人の前期高齢者における間食習慣と総死亡の関連：コホート研究から 主査：教授 荒戸 照世
	藤田 麻由 ふじた まゆ	トラネキサム酸の悪心・嘔吐誘発機序に関する神経生理学的研究 主査：教授 船橋 誠
博士（獣医学）	Sittinee KULPRASERTSRI シッティニー クンパーサトシイー	Studies on the cellular responses of duck cells to Duck Tembusu virus and Japanese encephalitis virus infection and the effect of minocycline on Duck Tembusu virus-infected neurons （アヒルテンブスウイルスおよび日本脳炎ウイルス感染に対するアヒル細胞の応答ならびにアヒルテンブスウイルス感染神経細胞に対するミノサイクリンの効果に関する研究） 主査：教授 安居院 高志
博士（文学）	小林 知恵 こばやし ちえ	S. ブラックバーンの準実在論と道徳の自然化 主査：教授 藏田 伸雄
博士（情報科学）	張 強 ちよう きやう	Surface-Enhanced Raman Spectroscopy (SERS) for Intracellular pH Monitoring at Individual Single Cells （単一細胞内pH分析を指向した表面増強ラマン分光法） 主査：教授 雲林院 宏
	高嶋 英厳 たかしま ひでよし	CAEモデル自動生成のための離散的形状表現を活用した三次元特徴形状認識技術の開発 主査：教授 金井 理
	Bilesan Alireza ビレサン アリレザ	Development and Accuracy Analysis of a Human Motion Capturing Method Using a Single IR Camera （単眼IRカメラを用いた人間のモーションキャプチャー手法の開発と精度解析） 主査：教授 近野 敦

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博 士 論 文 名
	氏 名	
博士（法学）	ロウ セイ 郎 晴	中国法はなぜ懲罰的損害賠償制度を取り入れるのか 主査：教授 會澤 恒
博士（農学）	さくらい みちひこ 櫻井 道彦	有機物施用を主体とした栽培様式における土壤微生物群集構造と施肥対応の総合化に関する研究 主査：教授 信濃 卓郎
博士（医学）	みずの や かずゆき 水野谷 和之	肝胆膵外科手術における周術期循環管理に関する研究 主査：教授 坂本 直哉
博士（感染症学）	すずき あきお 鈴木 章夫	Studies on methods for specific detection of abnormal isoform of prion protein and its application (異常型プリオンタンパク質の特異的検出法とその応用に関する研究) 主査：教授 堀内 基広

■ 諸会議の開催状況

役員会（令和3年12月6日）

- 議 案・第4期中期目標・中期計画実行計画の作成方針について
- ・第4期中期目標期間における部局等の中期計画の作成方針について
 - ・令和3年度財政状況及び目的積立金等の活用事業について
- 協議事項・退職教員（本学定年年令を超える者）の非常勤講師の採用について
- 報告事項・障がい者の雇用状況等について
-

教育研究評議会（令和3年12月15日）

- 議 題・ディステイングイッシュトプロフェッサー制度の改正及びディステイングイッシュトリサーチャー制度の創設について
- ・退職教員（本学定年年令を超える者）の非常勤講師の採用について
 - ・本学の国際戦略の策定について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
- 報告事項・第4期中期目標期間における部局等の中期計画の作成等について
- ・令和2年度に係る業務の実績に関する評価の結果について
-

役員会（令和3年12月20日）

- 議 案・ディステイングイッシュトプロフェッサー制度の改正及びディステイングイッシュトリサーチャー制度の創設について
- ・退職教員（本学定年年令を超える者）の非常勤講師の採用について
 - ・本学の国際戦略の策定について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
 - ・令和3年度教育研究総長表彰について
 - ・特別総長表彰について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学サステイナビリティ推進機構規程の一部を改正する規程

(令和3年12月3日海大達第152号)

独自の施設を持たない学内共同施設についても、サステイナビリティ教育等を行っており、これらの施設の協力、知見の共有等を行うため、同施設の教職員にサステイナビリティ推進員及びサステイナビリティ推進員補佐を委嘱することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における共同プロジェクト拠点の認定等に関する規程の一部を改正する規程

(令和3年12月6日海大達第153号)

共同プロジェクト拠点の活用促進と拠点運営、認定手続き等の円滑な実施のため、拠点制度を見直すことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員の懲戒の手続きに関する規程の一部を改正する規程

(令和3年12月8日海大達第154号)

多種多様な立場にある被害者が存在する非違行為に係る懲戒の審査体制を強化するため、懲戒審査委員会の構成を見直すことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則

(令和4年1月1日海大達第1号)

国立大学法人北海道大学人事委員会規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第3号)

国立大学法人北海道大学ディスティングイッシュトリサーチャー称号付与規程

(令和4年1月1日海大達第7号)

本学における教育研究の一層の推進及び優秀な若手教員の確保に資するため、ディスティングイッシュトリサーチャー称号付与制度を創設することに伴い、所要の定め及び改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学総長選考会議規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第2号)

国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第4号)

国立大学法人北海道大学法人文書管理規程等の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第9号)

事務局において、喫緊課題に迅速に対応する体制を整備するため、令和4年1月1日付けで、事務局の部に新たに特命的な業務等に対応する担当課長を置くことができることに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

北海道大学病院受託実習生受入れ規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第5号)

北海道内有数の大規模病院という環境を活かし、北海道内の精神保健福祉に貢献すべく、受託実習生として精神保健福祉士の受入れを開始することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

北海道大学病院研修生受入れ規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第6号)

北海道内有数の大規模病院という環境を活かし、北海道内の精神医療及び精神保健福祉に貢献すべく、病院研修生として公認心理師及び精神保健福祉士の受入れを開始することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学ディスティングイッシュトプロフェッサー称号付与規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第8号)

ディスティングイッシュトプロフェッサー称号付与制度について、より広く一般に認知されるようにするため、ディスティングイッシュトプロフェッサーの別名を定めること、選考の透明性及び教員のモチベーションの向上を図るため、称号付与の方法及び期間を見直すことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第10号)

本学のオープンファシリティについて、設備の登録を行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学遺伝子病制御研究所規程の一部を改正する規程

(令和4年1月1日海大達第11号)

令和4年1月1日付けで、遺伝子病制御研究所病因研究部門及び疾患制御研究部門に研究分野を新設することに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 研修

令和3年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修 参加者：20名

開催日：令和3年12月21日（火）

開催方式：Web会議システム Cisco Webex

受講対象者：北海道内の国立大学及び国立高等専門学校に所属する学生支援を担当している事務職員

研修概要：学生指導，学生支援及び学生サービス業務を円滑かつ適正に行うために必要な基本的知識，対応能力等を習得することにより，学生支援担当職員としての能力の向上を図ることを目的とし，北海道大学学生相談総合センターアクセシビリティ支援室 室長 榊原佐和子准教授を講師にお迎えし，「障害学生への合理的配慮」について理解を深めた。



榊原准教授による研修の様子

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
3.11.30	在札幌アメリカ合衆国総領事館 Andrew T. Lee総領事	今後の交流に関する懇談
3.12.13	駐日リトアニア共和国大使館 Algimantas Misevicius 臨時代理大使	今後の交流に関する懇談



Andrew T. Lee在札幌アメリカ合衆国総領事館総領事
(左から3人目)



Algimantas Misevicius駐日リトアニア共和国臨時代理大使
(中央右)

(国際部国際連携課)

人事

令和3年12月31日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 （辞職）	山 下 好 孝	高等教育推進機構教授

令和4年1月1日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【総長補佐】 （期間：令和4年3月31日まで）	藤 原 志 保	大学院工学研究院教授
【教授】 大学院農学研究院教授 大学院先端生命科学研究院教授 大学院教育学研究院教授 北海道大学病院教授 北海道大学病院教授 遺伝子病制御研究所教授 遺伝子病制御研究所教授	板 橋 衛 尾 瀬 農 之 柚 木 孝 敬 七 戸 秀 夫 高 橋 將 人 野 田 展 生 森 石 恆 司	愛媛大学教授 大学院先端生命科学研究院准教授 大学院教育学研究院准教授 北海道大学病院准教授 （採用） （採用） 山梨大学教授 （山梨大学を本籍機関としてクロスアポイントメント適用）
【課長・担当課長・事務長・室長】 研究推進部研究公正推進担当課長 国際部国際連携課長	阿 部 成 剛 馬 淵 奈 美	国際部国際連携課長 学務部国際交流課課長補佐

新任教授紹介

令和4年1月1日付



農学研究院教授に

いたばし まもる
板橋 衛 氏

基盤研究部門農業経済学分野

生年月日

昭和41年10月4日

最終学歴

北海道大学大学院農学研究科博士後期課程修了（平成7年3月）
博士（農学）（北海道大学）

専門分野

協同組合学，地域農業論



先端生命科学研究院教授に

お せ とよゆき
尾瀬 農之 氏

先端融合科学研究部門
X線構造生物学分野

生年月日

昭和50年3月16日

最終学歴

北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了（平成15年3月）
博士（理学）（北海道大学）

専門分野

構造生物化学・蛋白質科学



教育学研究院教授に

ゆの き たかひろ
柚木 孝敬 氏

生年月日

昭和47年12月 5 日

最終学歴

北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学（平成13年3月）
博士（教育学）（北海道大学）

専門分野

運動生理学



北海道大学病院教授に

しちのへ ひで お
七戸 秀夫 氏

医療・ヘルスサイエンス研究開発機構
臨床研究監理センター

生年月日

昭和43年 5 月 7 日

最終学歴

北海道大学医学部医学科卒業（平成 6 年 3 月）
博士（医学）（北海道大学）

専門分野

脳神経外科学，再生医療，医学研究倫理



北海道大学病院教授に

たかはし まさ と
高橋 将人 氏

乳腺外科

生年月日

昭和39年 7 月25日

最終学歴

旭川医科大学医学部卒業（平成元年 3 月）
博士（医学）（北海道大学）

専門分野

乳がん，外科学



遺伝子病制御研究所教授に

の だ のぶ お
野田 展生 氏

生命分子機構分野

生年月日

昭和48年 4 月 3 日

最終学歴

東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了（平成13年 3 月）
博士（薬学）（東京大学）

専門分野

基礎生命科学



遺伝子病制御研究所教授に

もりいし こう じ
森石 恆司 氏

肝炎ウイルス学分野

最終学歴

北海道大学大学院獣医学研究科博士後期課程修了（平成 4 年 3 月）
博士（獣医学）（北海道大学）

専門分野

ウイルス学

新任部課長等紹介

令和4年1月1日付



国際連携課長に

まぶち なみ
馬渕 奈美 氏

昭和44年10月28日生

平成4年3月 北海道大学文学部卒業
 平成5年4月 北海道大学経済学部
 平成8年4月 北海道大学歯学部総務課
 平成11年4月 北海道大学学務部留学生課
 平成13年4月 北海道大学工学研究科・工学部教務課
 平成17年4月 北海道大学工学研究科・情報科学研究科・工学部教務課
 平成18年4月 北海道大学学務部教務課
 平成20年1月 北海道大学学務部教務課係長
 平成22年4月 北海道大学学術国際部国際支援課係長
 平成22年7月 北海道大学国際本部国際支援課係長
 平成26年7月 北海道大学国際本部国際教務課係長
 平成27年4月 北海道大学医学系事務部総務課係長
 平成29年4月 北海道大学医学系事務部総務課課長補佐
 平成30年4月 北海道大学国際部国際交流課課長補佐
 平成30年7月 北海道大学学務部国際交流課課長補佐
 令和4年1月 北海道大学国際部国際連携課長

訃報

名誉教授 若濱 五郎 氏
(享年94歳)



名誉教授 若濱五郎先生が、令和3年12月18日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は昭和2年に東京生まれ、海軍兵学校（広島県江田島）に進まれましたが、終戦で帰郷命令を受けられ、戦災で実家が焼かれるなど戦後の苦難の中、東京物理学校（今の東京理科大学）、気象技術官養成所（今の気象大学校）を経て気象庁に進まれました。昭和30年には中谷宇吉郎先生と親交のあった和達清夫気象庁長官（当時）の推薦で、北海道大学低温科学研究所の気象学部門に助手として赴任されました。

当初は雲凝結核の研究を行っていま

したが、その後、応用物理学部門に移り、「積雪薄片の作成法」と「薄片を用いた積雪のミクロな圧密過程の研究」などの研究を進め、昭和41年第一回日本雪氷学会学術賞を受賞され、翌年には『薄片を応用した積雪の内部歪の研究』により学位を授与されました。

昭和30年代には国鉄（当時）や電力線の着雪氷問題や38豪雪などの雪氷災害が多発したため、北陸・東北での現地調査などを行うとともに、低温風洞を用いた着雪着氷研究等の雪害研究に大きな功績を残され、これらに関連して新幹線雪害対策委員会委員、昭和62年からは科学技術庁克雪・利雪調査推進委員会委員も務められました。

昭和39年の夏には「北大アラスカ氷河調査」に加わり、また「北極水圏学術調査」の一員として真冬の北極圏の雪氷調査に参加され、現地のイヌイットに大歓迎されたことなど、氷河や極地の観測研究を熱く語っておられました。それらを契機として、「雪の氷河水へのミクロな圧密転化過程」、「氷の塑性変形と内部破壊」等の研究を開拓されました。昭和56年には新設された降雪物理学部門に移り、より自然に近い条件下での雪の成長過程を明らかにした鉛直風洞内での自由浮遊実験

や、日本初の「降雪観測用高速三次元ドップラーレーダー」を用いた北海道西岸小低気圧の動態など集中豪雪のメカニズム解明や予測、更には、北海道外の集中豪雨観測など他研究機関との共同観測を積極的に支援されました。また、平成元年からは国立極地研究所評議員に任ぜられ日本の南極観測にも注力されました。

国内では、平成元年4月から平成3年3月まで北海道大学低温科学研究所長、平成7年5月から平成11年5月まで日本雪氷学会会長を歴任されました。また、海軍兵学校で鍛えた運動能力を活かして、北大体操部の顧問を務めるなど、研究所や学会の運営、若手の指導に尽力され、平成3年3月定年により退職し、同年4月名誉教授の称号を授与されました。

以上のような雪氷学を中心とした国内外での多大な貢献により、北海道文化賞（科学）、日本雪氷学会功績賞、瑞宝中綬章を授与されました。

先生の教育・研究等への多大なるご貢献に感謝するとともに、ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

（低温科学研究所）

編集メモ

- 12月17日（金），2021年ノーベル化学賞を受賞した化学反応創成研究拠点（ICReDD）のリスト・ベンジャミン特任教授が，寶金清博総長，増田隆夫理事・副学長，石森

浩一郎副学長，前田 理拠点長，伊藤 肇副拠点長とオンラインにて懇談しました。



受賞メダルを掲げながら笑顔を見せる
リスト特任教授



左から石森副学長，前田拠点長，寶金総長，
リスト特任教授，増田理事・副学長，伊藤副拠点長。

- 大学入学共通テストが1月15日（土），1月16日（日）の2日間にわたって行われました。本学を会場として行われた試験では，大きなトラブルもなく無事終了しました。

関係者の皆様，朝早くから長時間にわたっての用務，お疲れ様でした。



試験前日の正門の様子



高等教育推進機構での設営の様子

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景はクラーク像です。札幌農学校の開校式にあたってクラーク博士が唱えた「lofty ambition（高邁なる大志）」という言葉は，本学の基本理念であるフロンティア精神に息づいています。それぞれの時代の課題を引き受け，敢然と新しい道を切り拓く。厳冬のキャンパスで切磋琢磨する北大人を，澄んだ瞳は見守っています。

キャンパス風景 22 クラーク像（北9条西7丁目）



北大時報 ① No.814 令和4年1月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>